

特11

716

初時雨  
楓延錦

全



初時雨楓廼錦序

種彦の温雅に春水の濃艶を映ひ。然も尙は鼻韻に涉らざるも。人情を穿つ者。これも當代有数の少壯作家中に於て求めむとするも。予その容易に得べからざるを知らしむ。蓋し人情の隠微を發揮するや。特に學海の深遠にのみ據らざればなり。而して之れが完全を得たるもの。却つて舊代の遺老。戯作場裡の馬將軍に於て。觀る事を得へるもの。梅亭大人の實に舊代の遺老なり。筆端飽麗。また滑稽に巧み。にしてみれば。人の實に舊代の遺老なり。筆端飽麗。また滑稽に巧み。事し。温雅。濃艶。たる。人情を穿つにあり。讀者若し其の本領に至つては。んを思ふ。先づ本書を一覽せよ。春の旦秋の夕。花月にも増す。興味を。斯くなん。豈に讀者を誣る者ならむや。聊か茲に本書の御吹聴

癸巳三月梅香咲み初むる 窓の下に筆を執りて 金衣公子謹誌

紅梅や昔しあがらの殿送り



母の  
おしやう

母の  
おしやう



母の  
おしやう

母の  
おしやう

母の  
おしやう

7/6

五 雨 時 初

東 京 府 江 戸 市 芝 罎 町 住 居 する 芳 太 郎 五 歳 なる を 養 子 と な し たり 然 る  
 以 て 徳 右 衛 門 四 十 三 お 萱 は 三 十 二 に な り た れ ども 子 な き を  
 年 を 経 徳 右 衛 門 は 四 十 三 お 萱 は 三 十 二 に な り た れ ども 子 な き を  
 以 て 徳 右 衛 門 四 十 三 お 萱 は 三 十 二 に な り た れ ども 子 な き を  
 立 芳 太 郎 を も ち 六 年 め に お 萱 懐 妊 な し 女 の 子 を 産 し た れ ば 今  
 更 廣 子 出 來 て は 芳 太 郎 が お も は く 如 何 と 氣 遣 ひ な が ら も お 米 と  
 号 け 夫 婦 は 年 と り て 儲 け し 子 幼 愛 か ざ り な し 芳 太 郎 も 妹 を  
 得 し と て 子 供 な が ら よ ろ こ び 可 愛 が り け れ ば 夫 婦 は 安 堵 し て ま  
 す 一 芳 太 郎 を 慈 み 慕 じ たり 實 に 光 陰 の 過 る は 矢 よ り も 早 く 芳

初時雨楓廻錦 第一回



六郎十七になりければ戸主となしは右衛門は娘お米をつれ別荘  
へ隠居せんともお米を尋ねるに身代はよし芳太郎は自容身し  
からざるのみならず才機も勝れ内外の評はん宜かりしかば此方  
此方より縁を求め來たるを以て芳太郎にうの事をいふと廿三ま  
では女を託たりとて請つけぬゆゑ餘義なく其儘打遣さぬお米の  
十一に成りし秋徳右衛門病ひに罹り日を延て重りしかば妻に言  
ふ芳太郎は見どころある者ゆゑ假令逆節の事ありとも此方は讓  
るべしお米は妹にするとも女房にするとも芳太郎の心任せにさ  
せ其方は問を見て隠居なし心安く老を送るべし又芳太郎にも  
残るところ無く言ひ遣し終に黄泉の人となりぬ芳太郎は是より  
別して母に孝をつくしお米を子の如くいたはり家業に出精しけ  
れば身代ますく太り手代番頭もみな腹し家内和合して笑ひ暮

せり芳太郎二十になり男は美し程は宜しさうふ水多きゆゑ浮れ  
出さぬうちに嫁をむかへんと勤むれども取あはされば餘力なく  
又すて置りされは芳太郎は風雅の道を好み本所中の郷にすむ併  
諧の宗匠祿露庵本名梅村幽助の弟子となる幽助は月琴八雲琴須  
磨琴なども教へ一人娘のお千勢に縁をとり子一人出來たれど放  
蕩ゆへ離えんなし娘お千勢には我代げいこなとさせ居たり芳太  
郎はしバく稽古に來るゆへお千勢とも心安くお千勢は芳太郎  
が男よきと女才なきに思ひを勵かし夫とは言ねど心を用ひ大事  
にすれバ芳太郎もまたお千勢を憎からず思へり今日は帯圍はん  
ふんの月琴先生あだ名奢醫家といふ者と連だち仲の郷の梅村へ  
來り芳オヤ先生はお留守だとお言れお千勢は伺りした顔でアレ  
まア何様せう上ッてお出のを些も在じませんでしたは着もの思

下女茶はうじの庭を焼なんかんで僕の事のかんがへに身が入  
 りあけら忙然たる折から鳥影の吉兆空しからずで焦るゝ男の脚  
 来車とはエヘンと言たきりで千勢の顔を見つめて居る千  
 家さんも御一所だのに何様してチへオホ、と笑ふ聲さへ  
 愛らしくて顔かたち都て男好のする年増さかりなり芳句からへ  
 お出かけなすつた千根岸のか屋しさへ参りましたワ芳夫ぢやア  
 お歸りは夜に入りやせう吝先何にしても其處らへ往て一盃活を  
 入れべしだが女隊長も共に歩を促がしてはいかゞ千夫なら僕  
 けさ貰ったお酒が有り升から夫で腹の虫を宥めてお置なさいま  
 しな其うちには親父も歸りませうト下女に言ひ附酒のかんをさ  
 せ肴杯とりよせ酒もり始まりたれど芳太郎は深く呑ねば程よく  
 相手をして居るうち若醫家は酔がまはり吝眞の別嬪と稱すべし

はおろらくお千勢さんの事だから借みても猶ほりあるものを竹  
 五郎お千勢の離縁した籍先生は食殘し何處にだうして居さんす  
 やらだチ千其後は噂も聞ななんだが其様な話しは止てください  
 よウ吝だつて餘り情知らずの男だから吝い加減に聞ておき  
 なヨ離ればなれに咲ては居れど水に浮草根ば切れぬ十先生の  
 ばかり離の字で内証はかたがひに片時もわすれられくど言ふ  
 千アレ彼様な憎らしい吝ヘン旨くのたまふせ憎らしいか可愛ら  
 しいか先刻からの目元の電信は僕が判然みとめたりツ何ならつ  
 いで此手のすぢも

お千勢は少し目もとを赤くし「アレ否だよチ若醫家さん幾ら掛た  
 って拘ふに引力をやらのない電信だものチ自慰たいバかりだア

ねと塵を拾つて芳太郎に打つける芳太郎は知らぬ顔で千勢さ  
ん後生だか飯をたべさせてお臭な腹が空ちやア逆も木刀うちが  
出来ねへから者振態のお好み奇妙くうの内儀は矢張りッッ  
イ寝ねに縁のある枕橋まで往て来やすト出てゆく後には二人が  
さし向ひか千勢は酒の酔にかこつけ夫とは言ねせ色に見せまつ  
はりかゝる蕪かつら岩木ならねバ芳太郎もつひ解謎や博多の酒  
たのしき中となりたりけり斬れば伊路發句の會月琴すま琴の儀  
しに夜の更るときは泊つて踊る事も多かり斯てうの年をすぎ徳  
右衛門の寓子か米は十四になり母か蓋に似て顔かたち美しく花  
にくらべ柳にたゞへるも耻かしからぬのみならず性質もやさし  
くて母に孝をつくし芳太郎を慕ひて何事も芳太郎の教へをうけ  
習鑿かけなぞ欲しきときは兄さんを買つて貰なぞ母の言ひつけ

唯々と芳太郎に甘へねだるげへ芳太郎もか米を可愛がり朝夕の  
食事まで一ツにして家に在るときは側にはかり居るゆへか米も大  
きによろこび婚姻さする日を待居れば芳太郎もか米が男ならば  
家督すべきはづの者ゆへ女房にはか米を持ねばならぬと思ふに  
つけ何事もろの積りにて扱へり然るに春の末よりか米は氣うつ  
の病ひはつし人にあふ事を嫌ひ取りわけ芳太郎と共に居るを否  
がれば母は大いに案じ早婚禮をさせんと思ふに斯てはならずと  
醫者に見すれば疝が起りしとのみにて休したるとに言ふ芳太郎  
も心配し榮をのみなを灸をすゑたが宜からふのを憂しく言ひ  
ふ程遊のきはかしく返辭もせぬゆへ母か米をばしめ替々不  
思議に思ひ案じるより外詮すべなしか米は日にまし人にあふを  
嫌ひか米といふ侍女を相手に子舎にのみこもり居るにぞ芳太郎

は母の心を汲とり苦勞をさせまぬと思ふにより人形だの香箱だ  
のお米のよろこびううな品々をもち子舎へ來りて芳梅はさう  
だのト言ひお米は「ハイと」小夜着ひきかつぎて知らぬ芳太  
郎枕もとへ居り「ナせろんなだらうのう一寸是を見な人形は京  
が上手此笑ひ顔のかあいゝとろして文庫も器用に出來て居るぢ  
やアないか粗だり疊んだり爲れるのだせト双へ立れを見かへり  
もせぬゆへ侍女お筆は氣の毒ううに旦那様がいろく宜いもの  
を一寸まア傍覽あうばしませと云へき下をば向いて居るに芳太  
郎は苦笑ひしながら「オヤ」成程わるい虫だ又來ませうと手持  
なく出て往く入ちがひに來る母お「何様だへちつとは宜かか  
は食られたか」は「先程少し上りました」菓を食ないで往ま  
せんヨと言れてお米は起かへり「お茶と道はして下さいませうな

快しう傍坐い升蓋「うれは何より嬉しい事芳太郎も一層氣をもみ  
談摩を上るやら祈禱やら若いに似合ぬ心切私しの身にまつては  
此上もない悦び然のにお前は芳太郎をみると氣の済ぬ顔なんぼ  
年が往ないからとて左様わが儘では成りません私心の心も休まる  
様にノチお筆お前も側からお米に言てきかしてお呉と心をいた  
むる母お蓋はお米が今芳太郎へのふあしらいを陰にて聞しもの  
にやあらん然れどお米はますく「芳太郎にあたり悪かり芳太郎  
も始のうちは病の爲るわざと氣嫌をとり居たりしが能く見ると  
他の人には別に變りたる容子なく日増に愛敬づき新バし柳橋は  
おき吉原根津にもあるまじきと思ふ程美しくは成たれど始に引  
かへ段々會釋わるくなるとゆへ呆れかへり他に思ふ男でも有のな  
らんと愛相を尽し今は投つて構ひつけず問さへあればりの類へ



通ひますくお千勢と深くなりたり  
 お米かく芳太郎を嫌ひ始めしは何等の譯ありてぞ开は後に出るを見て知りたまへかし

第三回

坂倉の後家お菅は此ほを些しお米の病ひの快きを見て早く芳太郎に配偶せんとうの仕度にかしれば又々病氣おもり捨ておけば  
 支氣出て来るは全く芳太郎を嫌ふに違ひないと侍女らまで心づく程なれば芳太郎はなほのこと夫と察しはするものから腹も立すお米に簪をとり自分根岸の察へ隠居なさんと決し頼りた  
 の心辨へを爲るにぞお菅は氣をもみ出見世の女房に心利たるものあるゆへ芳太郎の隠居爲んとするを止めお米と郎君をして呉る様にと解せても無理狂生はまつびら御免うれよいかお米には

好た簪を取てやり自己は隠居して浮世を樂にふくりたいのが願だト請附ねば何様でもお米の心から直してからで無れば芳太郎へ十分に口がきかれぬと思ひ出店の女房はお米の心屋へゆく米「オヤお政よくお出だねへ調度お茶を入やうと思つて居たところ政「お菓子私持て参りましたト何やら包んだ物を出しながらお米の側へすつと寄り貴娘は旦那が根岸へ御隠居なさるのを御ぞんじですかエ米「いしエと憚りすれば政「旦那を貴様とゆくは御夫婦と誰もぞんじて居るお中あひだのに其様なを言ふが有ませうかと敷から格のお話しも心が急からで御座いテオハ、、然がなア夫を何と思召すエと問へばお米は悲憤むき様として居るゆへ政「大かた貴娘は他におぼしめすとがお有んなさるので伊座いませう夫なら夫と私にお明しなすつて下さいまし

なと顔見詰られお米は只頭を振のみ返辭せず政夫ならば何故且  
那をお嫌ひ遊ばしませぬお母さまが芳太郎を隠居させお米に  
を取せては亡なつた旦那の御遺言といひ世間へ顔むけがならぬ  
から何卒芳太郎の機嫌の直る様に話しをして呉うと被仰ゆへ且  
那にうの山を種々申し上りましたが逆もお納はなさいませぬお米  
の客子では外に添たい男が有のと思はれるから自己は隠居して  
お米に跡を取らせるとの御決心子供だく空然して居るうち  
腹帯をゆるのが世の常まア貴様のお心をお聞申したうへと  
ぞんじ明日は根岸へ引越すと被仰を待ていたいたのが少爺の  
事然から貴様が外に彼様なさりたいと言ふお話しが有たら打明  
て旦那へ申し御家産を二ツに分てもと存じ升からお隠しあうば  
さすに〇お嬢さん〇サアお話しなさいまじよと首れてお米は

はろくを願す泪にきは俯むき左右の返辭を爲さしければお政は  
猶々疑がひて何様なとでも私しが宜い様にかはからい申し升か  
らサと膝すり寄れば漸すこし顔をあげ米勿体ない何で我情がト  
言たきり泪を袖で徐と拭政其様なら何故旦那をあのやうに素氣  
なく遊ばし升へト言れてお米は又はろく涙に口隠りの折から  
母のお首も出来りお政よく言ひ聞せてお吳芳太郎の志し私しに  
案じを掛まいと未だ三十にもならない身で隠居をしお米に跡を  
繼せ様とのと其有がたさを拜んで居る親の心も知らず芳太郎へ  
對しての我まゝ氣すか去年の春の大病も身にかへての介抱の  
丹誠でさうやら彼様やら治つたれお其後とても欠張ふらく夫  
を五月蠅ううな顔もせず其處の病院此處の榮と痒いところへ手  
の届く世話の芳太郎が何で氣に入らぬのぢや其様な事では芳

太郎が堪忍しても私しが許さぬ芳太郎と一所になるのが否なら  
 此家を出て往をれと常に變りし腹だちも御無理ならずと泣入る  
 か米お政が側から取りなして「もう了簡あうばして下さいまし  
 若しお米さん浮合点が参りましたか」母「否々」あの大人しい芳太郎  
 よく「腹が立バころ根岸へ隠居しやうと思ふのも無理はない  
 もう「私しは此子には構ひませぬ去年の病氣から打て變つて  
 芳太郎への會釋長生すれば廻多しとやら一層此子が無かつたら  
 悲しむ思ひは仕舞ものト見やる目もとに涙を浮めお米が子舎を  
 出ゆげバお政は再び膝を進め「お母さまのお腹立も御無理は御座  
 いません明日は旦那が根岸へお引越しなさい升とだから旦那の  
 お側へ早くおいで遊ばしてト言ふとき遙かの彼方にて芳太郎の  
 咳する聲聞へたり

第四回

お政は猶か米にむかひ泣て「お出遊ばしては譯が分りません  
 何様やも旦那のお側へおいでのがお否なら最々口出は致しませ  
 ん併慈母さまへお氣の毒ゆゑ是がお暇ふたゞびお家へは上り升  
 まいお氣任せになさいましと立に掛れば袂を押へ「米「アレまア政  
 其様なら旦那のお側へおいでなさい升か「米「あい「政「左様なら私の  
 居るうちにと急たてし兼問着を若かへさせ泣顔を拭せるやら髪  
 を撫つけさせるやらして押やられたる一間のうち芳太郎が眠り  
 し枕邊へ徐と居り間の悪さうに搦搦しごきの端を結んだり解た  
 りしながら考へて見れば見るほど我まゝ氣すぬと思ゆしお母さ  
 まのお腹立不孝だとは思ひながら打明てお話しの出来ぬ譯が有  
 てお兄いさんにもト言ひかけ芳太郎の寐顔を見つめぼろりと

す涙と共に思はず漏すすゝり泣うの忍び音が芳太郎の耳に入て  
目をさまし「エ、悔りしたお米ぢやアねへか何様して今時ふん何  
をして居る夜を更しては毒だから早く往て寐たら宜らうト言れ  
て猶もしやくりくる泪の顔を袖で押へ返辞するさへ口隠れバ芳  
梅でも悪いのかうの用簀篋にもお前の合樂がある出して遣う  
かと言へど頭を振るのみゆゑ芳太郎起あがり「何時にもない事こ  
へまア何しに來たのだト言れてやうく顔を上げ「ア、何卒  
兄さん堪忍して下さいましト思ひ切ての一言も聞とりかねる口  
のうちあからむ顔を移にかくせば「芳何にも倍禮とは無らう明日  
は根岸へ引こすから虎烈刺が近所へ來たら早速にげて來るが宜  
いヨヤア、自己も眠るから風でも引ちやア悪いお前も早くい  
つて寝なせへト言を寂然して居るゆゑ芳太郎すこし考へながら

折角病疾の快くなつたところを夜更しは毒だ自己の咎ものでも  
引かけて居なせへ此様なを言たらいよく氣に入ぬへが是が  
納めた腹を立すに聞が宜い慈母さんもだんく重るお年御病身  
にお成んなすつたから成たけ優しく孝行にして上なせへ开して  
お前も獨身で長くは居られねへ今年の暮か來春までには心の濟  
だ譯をもらひ婚禮をさせなけりやア成らないが今迄のやうに氣  
随ではならねへ來た者の氣を悪くさせぬ様に扱をとるのが女匠  
の役自己に物をいふ様に無難にするを男といふものハ馬鹿な者  
でつひ自狂だとか思々しいとかで異な心を出す奴だから能氣を  
つけて取あつかひなせへと言たら大きにお世話じふんの氣に入  
た男なら何様にでも六事にすると言ふだらふが産れ落から一所  
にうだち子とも妹とも思ふから末を案と今日は異見を言ふが明

日は話しをしやうかと思までは浮んでも人に居ねへときは  
 か前が除るので折をうしなひ夫なりに爲て置たのだがか前もろ  
 うく子供の仲間はずれに成のだから些とは親の位牌所も大事  
 といふ氣が附うなもんだ今夜は何と思つたか側に來てめたも  
 んだからか前の疵しやくに逆らうとは知りながら腹の服れの店  
 鋪しも是が言ひ納めと思ふからだかならず恐く取るめへせ〇サ  
 アくまう話すとはねへ根岸へ往たからとて折ふしは此方も見  
 まはらなけりやア成らねへのだから腹が立たらかんにしてま  
 う自己も寐るからか前も往て寐なせへと枕につきて夜着ひき冠  
 れどか米は猶もどつおいつ思案にあまる緋はんの袖を前齒でく  
 はへて嘴ながら今宵是なりに爲るならば兄さんにも今迄の言ひ  
 わけが立す又慈母さんへも不孝か政の心切をもむにし此身も否

あ世をかくり氣随氣まゝと世間の人に苛られるのは元來の覺悟  
 だが兄さんが己を嫌つたとお思ひでは哀しひから一層打あけて  
 と思つて見ても芳太郎は知らぬ顔して寐て居るゆゑ忍へかね揺  
 り起しながら蒲團の端へ我を忘れて泣ふせば芳太郎悔りし枕か  
 いやり反起たり

第五回

芳太郎はか米に泣れて悔りし芳清でも起したのか往て寐なと古  
 ふのに何をして居るんだ米アノ兄さん根岸へか出なさるのはお  
 止なすつて下さいましな芳何故米今までの事は何卒御勘忍あう  
 ばして是からは腹を立たり何かは致しませんから家にお在なす  
 つてよサ兄さん芳今さら留すとも宜ぢやアねへか自己が居ねへ  
 と言てか前が慈母さんへ孝行を爲る差つかへはやアなるめへ米

い、ニ貴郎が根岸へおいで遊ばすとて慈母さんが御苦勞になさ  
 いまして手前が悪いからだとのか腹立夫だから何卒兄さんよう  
 一言かけてまた泣ふせば芳太郎苦ひ顔して煙草を飲ながら早  
 を言ば自己が氣の利ねへのだ幼稚ときからの許嫁で嫌でも夫婦  
 にされるかと思ふのが種に成てのお前の病氣うんなどは氣が  
 つかず今まで浮々彼様やつて居たは我身ながら間拔の隊長否が  
 るものを無理に婚禮する様な罪は作りたくねへから夫で根岸へ  
 隠居するのさお前の身に取たら望みさほり何にも泣とは有めへ  
 へんと言れていと哀しさの涙に物をも言ひおさりき「嗚呼つ  
 まらねへ苦勞をした是から根岸へ往て世を面白く暮すつもり明  
 日の晩は樂々だ米今までの事には些譯が有ましてだから堪忍し  
 て下さいまし〇ニ兄さん「芳譯が有うと思ふから夫と言すに隠居

して運るのだが子供々々と思ひの外左様生根を居て出たからは  
 少し言ひてへ事がある此春から其方の仕うち夫も是も慈母に苦  
 勞をかけめへと思ふから堪忍の二字で疝癪の駒を擡つておくの  
 だ世の中は否な事氣に入らぬ事も義理の爲に東バくされ自由の  
 權をふられねへので持たもの恩を知らぬは畜生同せんぐつゝ  
 爲るのを會釋て居れば限りがねへきりく其方へ往て賃はうと  
 突放されてお米は「ハッと思ふよりして差込む癪に氣を失へば芳  
 太郎おどろき抱き起して鉄瓶の温湯に藥をのませッ、お米々々  
 と呼聲を容子いかいと程近の座しきに覗ひ居しお政は聞つけ  
 來りこの体を見て「何様遊ばしましたお米さんモお米さんと呼  
 立られ漸々か米は目を開きお政かへあの兄さんが何様しても堪  
 忍あうバして下さらないから私しは是なり死たいよト怒々的な

がらも何處やらに眞實こもれる言葉のはしに芳太郎天恵を誣な  
 がら何だか自己にやアさつぱり譯が解らなくつて困るの。政左  
 様だらうと存じて私しが参りました貴君のお腹立も嘔とお察し  
 申し升が明日根岸へのお引越はマア、お待遊バしてお米さま  
 のお胸をソレあの篤りお聞の上何様でもお心に當はずば其時こ  
 うお留申しは致しませぬお米さまのお懇ももう格別のはお有  
 なさるまいから今宵はお米さまも此お座しきへお床を廻しませ  
 うお話しを被成ながらお眠ましと忠々しきお政が世話を無にな  
 さんも氣の毒と芳太郎はお政がする隨意々々すて置ばお政ハ芳  
 太郎の側へお米の薪床をとり政泣子と地頭には勝れませぬへ  
 オホ、左様なら旦那お休み道ばせお米さん置々を御仰ては  
 狂ませんよと言ひつ、忙々出てゆく芳太郎は手強くやつては

第六回

たれぞまだねつからの恍惚子のお米ことに内氣は知て居る故何  
 か行違ひの事でもありはせぬかと疑ひ起れば依らず陣らず知ら  
 ぬ顔して寐てしまふとお米も側によし柴のしこるばかりなる思  
 ひに疲れいつしか眠りに着たりけり

眞事の戀はまだ知らぬぞ早覺にたる苦説から蒲團は双べて寐な  
 がらも隔て置し枕さへ口無し色の乃之呂途に話しも無て夜ハ明  
 ッかあい、と鳴鶴は餘所の陸みのきぬ、にて撞出したる鐘  
 の音ころ我身の上の辻うらなれなご心の内に思ひつ、芳太郎起  
 出で朝の事がすむと手道具なご片附はじめるお米は芳太郎が  
 岸へゆくと言ふを案じて食事もせず青い顔して塞いで居るゆゑ  
 書斎の内の物なご些ばかり持して遣りても自分は先見あはせに

しお米へ再び我子舎へ引こんで臥たりと聞きうの枕元へ往き  
 芳「又ねたのか大分色が悪いせ米「オヤ兄さんト言ひながら目の縁  
 を少しうるませ吾儕はもう死で仕舞たう御座い升芳「こりやア大  
 笑ひ囁嬉しからう物を言れるさへ嫌ひな自己が根岸へ往のだか  
 ら米「何様に倍禮ても堪忍して下さいませんのかねニ芳「誰に教は  
 つて留るのか知らねへが其様と云て是なりにお美興を居られた  
 らまた大病人になるだらう米「是バツかりは死でも人に見せまひ  
 と思ひましたのが最仕方が無からか目に掛ますト手を伸して小聲  
 の引出しから取出す玉章を芳太郎は横目に見て今さらぎつくり  
 胸にこたへ少し急こんだ風にて芳「大方うんな事だらうと思ッ  
 た最う見るにやア及バねへ夫だから自己が根岸へ往て還のだア  
 米「吾儕もお目に掛たくは無いのだが吾儕の心のうちを貴郎にお

知らせやしたさ慈母さんに不幸と知りッ、氣をお録せやたも最  
 仰ゑで傍坐い升と彼の艶書を芳太郎が前にかく芳太郎は手にも  
 取らず怒りの眼を斜にしてうの表書をちよいと見ると且那さま  
 千世よりと有るので悔りし芳「うれば彼のの中の輝と言ひかけて天  
 を揺ながらうの艶書が何様したといふのだうして夫をお前が  
 から請取た米「アノチ去年の暮に慈母さんが其方も最う子さもに  
 は致して置ないから兄さんのお世話だけは他の者にかけずね  
 ば成ぬと被仰たから嬉しい事とぞんじ衣服の出し入れするさへ  
 樂しみに致して居るうち此春梅見にお出の時のお羽織をたしも  
 うと爲ると其袂から出た此お玉章もめくちやに成て居た故何の  
 反古かと思ひ一寸明て見ると實に面白文句だから吉原のお艶  
 染から参つたお艶書かぞんじ段々讀でゆくお其様な書ではな



く吾儕の身に取りまうく、良しい事ばかり夫にうの時其處にあつた百人一首の歌骨牌に忘らるゝ身をば思はずちかひてし人の命のをしくもあるかな、と言ふのが出て居ましたので真に左様兄さんとお千世さんとやらとは能く深いなかと言ふを打ち消し「イヤお前も中く」な嫉妬、こんじやうだ何も百人一首が引あひに出るほどの譯もあるゆへ「アレ嫉妬なんぞを嫉のヒヤアありません兄さんのお身を大事に思ひますからの事」芳「こりやア可笑しい何様いふ理くつで」米「夫でも此艶書の文句が芳「ハア何が書てあつたッけ」手に取り上げて打ひらき、始まりの處は極り文句だからよしとして〇エ、昨日は一日待ばけの化粧をせんをさせて、澤山さうなさいまし元來吾儕は柳原でうる古股引お米さんは大丸の仕立おろし何瀬比べものにならぬのは承知して居ます」

赤子を食れば中風になり河豚には毒があり升ヨお米さんばかり可愛がり吾儕を捨ては妙見さまの引合せだと仰つた妙見様へお濟なざるまいかと思ひ升ヨもしや此まゝこがれて死ば怖くないよに化て出ると言ふ都々逸の様な氣よしぢやア存ませんお前さんが水姓をしやうもんなら吾儕は生ながら鬼婆になり道も閉すに喰殺して仕まふから覺悟をしてお在なさい、然が一昨日の夜お前さんの二の腕へ食ついた手際ではモリモリと骨まで喰られまいかと思ふから悔しくつてならないんですヨと讀みかけて「何だ此様な下らねへ事を双べてある博達もの、艶書なんぞを恭しく取ておいていやはや呆れた稚子だと言ッ、再度天窓を揺たり

お米は氣の毒さうに送擲しながら、アノチお千世さんの其か宛書  
 で吾儕の心が少しはお解りになりましたか。夫だから實は鎌倉  
 とやらへ往て厄となり兄さんを止て他にト言ひかけ顔を赤らめ  
 下をむき疊の座を袂の先て掻まはして居る。芳自己を止て外に  
 書なんぞを贈されぬ男を持つと思つたのだらう。米、ア、レ左様  
 ぢやアありません。矢張り兄さんの妹で一生お念佛をすして暮し  
 お千世さんのゆ安心なさる様にしたらお千世さんが兄さんを喰  
 殺らうの又妙見さまへ濟まいのと被仰はなさるまい。芳、アハ、ハ、  
 アいや困る乳飲兒だぞ何ほ自己が餓い性質だと言て親子が柿の  
 やうに天窓から囓られて堪るものか。米、オヤ夫でも鬼に成たら人  
 を喰ますだらう。大江山の酒呑童子を書た本にありましたものチ  
 開して吾儕の氣に掛るのは妙見さまの事。芳、ハチ異な物がお虫又遊



らつた奴さす来然けれと怖いぢやア有ませんか先刻もすした百  
 人一首の忘らるゝ身をア思はず廻ひてし人の命のをしくもある  
 かなの歌の講釋を何時ぞや聞せて下さいましたのに忘れられる  
 自分の身の上は何様ならうと夫を苦らうには思はないが未し  
 う添とけ様と神佛を請人にして怒ひをたて今さら私しを見捨た  
 ら前人に立られた神佛が承知はなさらず罰をあてゝお前を生し  
 てハお置なさるまい夫だからの罰を當られて死か前さんの命  
 が惜く案じられると言ふ心だと被仰たでは浮座いませんか然て  
 見ますと兄さんとお千世さんと妙見さまへ浮夫婦やくうくの  
 ひを立てお置なすつたに違ひあるまい夫だから何程慈母さんが  
 婚禮を仕ろとおつしやり吾儕は嬉しい事と思つても万一兄さん  
 妙見さまの御罰でも當らうかお千世さんが鬼になり兄さんに

仇でも爲様なと有ては大變吾儕の身などは何様成ても宜いと  
 存ましたから心の内でお詫を仕乍ら一生懸命での氣配氣まゝ  
 母さんにお案事させ申すハ不幸と知ても其事を打あけては兄さ  
 んに濟す増てお政なんぞには少しの氣ふりも知らせられません  
 から吾儕の爲を思つての強異見その心切に對し隠して居ては悪  
 い罪なと存しても言すに居たので御座い升ハ「芳然双べられて  
 見ると天頭の痒くなるわけで慈母さんに不幸と言せお政に我ま  
 へ者と思はせたは鬼と妙見さまの所業で其鬼と妙見さまを出現  
 させたは自己だから自己がお前を悪いと思つて怒つたのは一す  
 との出來心からの鬼が身をせめたわけ最まう根岸ごころか穴へ  
 這入らなけりやア成らなくなつて來たが又も有と被嫌なもの  
 蛇書なんどは出たらめだから鬼はさて置き見とし入道一ツ目小

僧になるを書て有ても舌切雀の萬籠の蓋かぶせ掛るのだと思は  
 なけりやアならねへ何程恍惚子でもお前のやうに眞正にどつ  
 て兼言同せんな博連文句の爲に人にも詰らなく否な思ひをさせ  
 自分も病疲れるほどの苦勞をしちやア間尺に合ねへ話し屋は雨  
 の降る穴地獄は餘が寐がへりをするのだと言れても眞正に辭る  
 だらう困つた赤ん坊だなアと笑へどお米は眞面目にて「アノッ兄  
 さん夫だから慈母さんやお政には細禮をするを申して置升から  
 兄さんも何卒その積りていらッしやッて内證は矢張妹と思召て  
 下さいましな开して其譯をお千世さんのお慈んなさらない様は  
 宜く兄さんからお話しを遊ばして置て折の宜い時お政かなにか  
 に委しく話し慈母さんへ申し出させお千世さんを表向でお嫁に  
 お貸ひあそばししな左様すると吾儕もまた是までの通りの妹

にして敷き升からさと妬み心の無のみならず我身一人に苦を自  
て怨み顔せぬ真心に芳太郎は且感じ且耻ぢ胡麻かし象し跡こた  
へ口隠とのみ多かりけり

第八回

芳太郎はお米がだんくの話しを聞き世間知らずの生倅ゆゑか  
千世が書し洒落じやうだんの破達賄書をも誠として養うの苦勞  
を做したるは思しさに似たれども此身を思ふ真心の厚きより出  
しなれば深く感じ嬉しくもあり可愛くもあり思案の外の淫奔か  
ら不孝の娘氣する者と誘らせて置ながら臭いもの身知らず自己  
の罪を細へあげお米の仕うち不平を起し根岸へ引こさうなを  
し思つたは耻かしの眼りお米の心とお千世の心と比べたら孔  
雀に木兎牡丹と兎補はさの違ひ此作ア一ばん大仕振り降参だと

心の内で天窓を掻お米の島田に掛た緋鹿子の縮緬がまつ白な頂  
のところで振ら下り落かいつて居るを撮み揚てやりながら芳自  
己がちよいとした事の却合で意地きたなを遣たもんだからお前  
は勿論慈母さんやお政にまで苦勞をかけ氣の毒せんばんお前が  
厄になるどころか此方が阿房多良経寺へでも往き除障摺り坊主  
にでもならなけりやア申し譯の立ないしだいサ泥水商賈や水性  
女の艶書などは男を鈍さうと思ふから百年も馴染だ洋犬のやう  
に戯れかゝり出雲の神から指令をうけ二世の先三世の先へも界  
紙へ書た届を出し印紙をはつた起請は毎日に取かはした様な事  
が双へて有ても轉戀手段で嘘八百といふのは夫から出たと決し  
て深い譯でハ無のだから程なく疑ひの晴る様にして見せる何に  
しても夫までは慈母さんやお政には婚禮をすると言ておき夕べ

か政が持て来た夜具を今夜も双べて寝かす氣を見え自己のど一  
 ツ所へしまはせられたから是なりするく毎晩ならんで寐や  
 うぢやア無か否だと言ても今度ハこつちが忍堪して貸ふ譯にな  
 つて来た。エか米後生だから左様してくんなト言れて益々顔を  
 赤らめ米吾情ハアノヲ夫だと誠に出しうござい升が万一千世  
 さんとやらに知れたら「芳」また始めたヨ「米」オホ、夫でも何や  
 ら言んとする折子僧が障子ごしに黄いろい聲で「アノヲ且那さ  
 ま中の郷からだと言てエ、かんく」のうのうたの様な名のソレく  
 者「醫家さんとかいお出なさいました芳太郎之をき」チヨツと舌  
 打し苦い顔で「よし」と言ひながら表座しきへ出行たり是より  
 してお米は芳太郎と寝間を一ツにするものから離れくの浦圖  
 の枕ひどり淋しき夢を見ついたらづらに山鳥の尾の上の月と有明

れば靴を履て、痒きを掻き啞が苦きを紙らせられし心地や互ひ  
 にするならん芳太郎は夫ゆゑか猶をりく中の郷へ往き夜ふけ  
 て歸る事なごあれと母お登は知りて知らぬ顔をして居るゆゑか  
 政が氣を揉み芳太郎に異見をなさんかなと思ふと度々なれどか  
 米は先頃芳太郎の居間へ一ツに寐かしてより芳太郎と羨ましい  
 程なか睦じくなり何時來て見ても機嫌能さるくしけれバまづ  
 其儘にして二人の容子を窺ひ居れり  
 其好氏歎じて曰芳太郎は銅鑄佛かお米は木造菩薩か幼稚より  
 親の許せし許嫁にして且くれくの申なれば今一ツ座しきに  
 餘人をまじへずりの字八の字に寐て居るうちには雷さまも鳴  
 鼠が天井でぐわらくと騒ぐともあらうにお米が「レ、レ、レ、  
 とも言ず芳太郎も悪い晩だとの睡もかけず三々九の盃すむま

で近江の荒庭とみの蒲團のさかひを隔て兼ものがたりで濟せ  
るは柳下悪でも出来ないしんぼう孟子に相辯を立させたら懸  
の清なるものと入札すべし開化の人の目からは頑固と言んか  
間拔と笑はんか特に芳太郎はすでにお千世どの手際もあり只  
通すべき下紐の臨にあらねど案外なるお米が貞操に一本まぬ  
られ我身に取るところ多ければ爰に至って懸の悪地を突張  
るならんか併この辛抱が出来たら何方でも通てほらん遊ば  
せ

第九回

芳太郎お米は中睦まじくして初に服せしのみならず既に寐るさ  
へ一ツ座敷なるものから蒲團の模様は吉野川被たる夜着の正ね  
て高きは妹山香山に比へしならねど互ひに懸しきその顔を餘所

は見てのみ明しッ、夏去り秋もまた過て小春のそらの麗しけき  
冬の中ばとなりたりけり一日芳太郎お米をよび「今日は髪も結  
ひ化粧も出来て居るからかねて左様言ておいた中の舞へ連れて往  
から一所に往なす米お千世さんのお家へで御座いますかまア娘  
しい然が間が悪いでは有ませんか芳何の構うものか早くお千世  
どの譯をしらせねへぢやア公園の櫻で見てばかり居なけりやア  
ならねへ其替り覺えて居るだらうの米何をエ「今日いつて見て  
疑ひが晴たら妙見さまだの喰殺すだのとは言せねへ目米何の事  
だが空然わかりませんワ「芳知れねへでも宜しヤ早く支度をしな  
し米「夫ぢやア大急ぎで衣服を着ませうヤト忙々我部屋へ往き化  
粧しなほし支度出来ければ芳太郎は待かねたる事故すぐに侍女  
お雫と子僧を一人供につれ母お登にそのよしを告げて出かけ直



に河岸から船に乗り大川を浜洞てなれめに向ふ側へつけさせ竹  
 町の渡しの方より上り中の郷の篠路庵梅村へ往ばお千世も芳  
 太郎が天気ならばお米を連れて来るどの隙の約束なるゆへ十分  
 に化粧して待てをり今芳太郎がお米の先にたち庭口より入り来  
 るを見て「千「オヤよくお出なさいましたア」と座敷へをほし  
 お米の恍惚子風を見て此方はさすが苦勞人てらさぬ様に挨拶す  
 る芳太郎は四邊を見て「骨董家の御歸宅はせあつて大分お歸り付  
 がちがひやしたチ今日は皆さんは「親父は相かへらすおやしき  
 宿でハ其處らにをりましたッけト言ふとき手に山茶花の枝と鉄  
 をもちて小座敷の椽より上り来るは年の程二十八九にもあらん  
 か垢ぬけのした好男子なるがお米の顔や姿をしろりく「見なが  
 ら「是は芳さんよくお出なすつた。此方がお前さんの是と言ながら

小指を出し「お米さんで坐いますか「御覽のとほりの赤坊何女  
 んか心やすく。ニお米此方はお千世さんの旦那さまで竹五郎さん  
 と被仰のだ「竹「私も遊蕩すぎからまばらく追ひ出されて居やした  
 を芳さんのお蔭で此はさやうく「山の神への詫言が協ひ歸つて  
 来た譯何から何まで御世話になり有がたう浮座へやす「挨拶さ  
 れてお米は顔を赤めつ「お初ウと言ふも口のうち辞宜する振さへ  
 無支度解  
 第一回にその名見れたるお千世の御養子竹五郎は男より美の  
 みならず才智も些はまはりけれども色を好む事甚しく又酒に  
 ふけり悪きに傾くの風ありしゆゑお千世の父これを見限り竹  
 五郎が爲したる借金は我引うけとし竹五郎を出し置にんに及  
 びたるなり芳太郎は竹五郎とも恩意にしたれば竹五郎が離れ

んの後か千世と情合ある中にはなれど彼は後とり娘のみなら  
我より年上にて子持なれば女房にはされず然れどか千世のふ  
に家を繼せお千世は表向に世話して困ひ置んかなと思ひたれ  
ど馴るゝに従がひ水性の持まへ置はれ少し否氣になりたるを  
りお米の眞實心わかりしかバお米の疑がひを晴すためにか千  
世と手を切るためと竹五郎の居きことを尋ね寄家口をきか  
せ竹五郎の借金はことく拂って遣り梅村へ託させたるに  
孫の可愛さながら梅村も承知しお千世は芳太郎と離るゝは否  
なれど竹五郎にも又惚て居て子まで出来た中なるゆゑ淋々  
心し芳太郎とのとは夢と諦め再び竹五郎を呼び迎へ夫となし  
たるものなり

第十回

再説中の郷の梅村には芳太郎と共にお米がはじめて来りしなれ  
バ心を尽したるお千世の馳走に各々すとし酔を催し芳時竹さ  
ん彼の茶碗は何様なつた子竹何れ丸印の法さへ附ば取戻せる譯  
に致やした芳そりやアまア宜かつた夫ぢやア早く持て来て養父  
さんの安心なさる様にしてお上なせへ儲か百圓だつたねへト憤  
中より五十圓紙幣を二枚とり出して渡せば竹五郎は天窓を掻き  
ながら茶碗を取り戻せさへすれば借金は償ひて戴いたし養父へ  
出した襦袢は皆済になりやす然が是では眞に恐縮持てるとい  
ふところから送引かゝるのだが女郎とねんねこはもう止て内の  
坊の守歌ねんねこと交換してお仕なひなせへ實に限りのねへ事  
だから千はんに芳さん何卒異見をしてお呉んなさい呆れた性惡  
であり升からサ松坊が胎内にあるも構はず柳橋の小籠に連上

それからまた猿若町の竹「あやまつた」と拜む真似をしながら  
 竹「お米さん貴嬢もやつぱり芳さんに後継いふ塩梅で御座やせう  
 ね千「オホ、まだ、此様なことでは往ません若貴嬢の旦那  
 さまが吾儕の宿の様にございまして大の灸でもすゑてお上げ  
 あさいましよお足の裏か何かへ「芳」お千世さんは水姓の悪制府で  
 たてた城如學校の女教師を拜命されたのだから能傳習を請てかき  
 なナ千「ア、レと言ひながら小皿に在筆生姿を撮み芳太郎に打附  
 んとしてお米の顔と竹五郎の顔とちよいと見元のところへ「ま  
 ア悔しいぢやア有ませんか竹「然も夫りやア真正だから仕方ね  
 へ折から聞ゆる淺草寺の鐘に芳太郎袂時計を出して見て「オヤま  
 ヲ五時だ夫ぢやアお米お暇にしやうのヲと勝手の方に居る侍女  
 のお準と子僧にも支度させ芳太郎は襦袢の出ぬうちと思ふゆゑ

大概に切りあげて梅村を立いで元の河岸から待せておいた船に  
 乗るとお準と小僧は臨の方へ出て眞乳山はあれだの築波山が見  
 ねるのト言て居るゆゑ芳太郎少し聲を低し「お米疑ひは晴たらう  
 の夫ともまだか「米「實にお氣の毒で勿体ないと思したと思ひ升ッ  
 芳「何故「米「兄さんのお心づかひを被成も知らず深いお中とぞんじ  
 たからお千世さんを内へお呼申し吾儕は實の妹にしていたゞま  
 未來とやらでは其替り添てト言ひかけ下を向き顔を隠し「夫だか  
 ら我まゝを申し慈母さんやお政にも阿られる様なとを致したの  
 で伊座い升「芳「幼稚ときから心持は知りぬいて居るのだから何か  
 仔細のあるとは思つたが併外に惚た男が出来てかしらんと考  
 へると少しは腹も立たのサ「米「何様して勿体ない其様心がありま  
 すものか「芳「左様でも無らう米「ア、レまアと言ふとき船ハギイッ

と音して廻り棧橋へドンと着芳「オヤもう来たかどお米の世話を  
 なし船を揚れば子僧が先へ駈つけて家へ知らせる芳太郎はお米  
 とお俵を運て裏口から歸り芳船の中はめつばう寒かつた早く船  
 へ入れて遣てくんな下女「ハイくあの政さんが何かお指へに  
 成てお歸りだを上るをサしては浮座いしました芳「何しても身体を  
 温めてからの事にしやうサアお米浴て来なれ米「まアお前さんか  
 先へ芳「そんなら左様しやうかと芳太郎は湯のへ往か政はお雨  
 人さまがお歸りその子僧の知らせに勝手より駈てきて「オヤお米  
 さん且那さまはへ米「今お湯だヨ政「今日はおいしい物を上り然  
 からお兼間で一ツお上り遊ばしませ米「夫は有がたう船で寒いと  
 被仰てだから早く上てお呉なと少し話をして居るうち芳太郎  
 は湯から上り浴衣のまゝで来り芳「お政大きに近く成やしたサア

第十一回

お米いゝ加減にうめて来たから早くはいんな米「はいアノお政が  
 政君へいろく、伊勢走を致しますとサと言ひ棄て風呂場へゆく  
 芳太郎は後見送つてお政を手招きすればお政「ハイと芳太郎が  
 うバへ身をよせたり

第 十 一 回

芳太郎はすこし笑ひを含みながら「お前にも種々苦らうを掛たが  
 もう何様か宜さうだから安心して呉な政「夫はまア有がたいと  
 で浮座い升何卒末かけて最情がつてお上げ遊ばして下さいまし  
 な芳「大恩ある雨親の血をわけたお米彼が亭主で此方が女房の氣  
 で居るから我まゝ位は亭主の權決して悪くハしねへ案事被成  
 な政「有がたう御座います嗚御座居様が御悦びなさいませう夫で  
 はアノ今宵はしつぱりオホ、ハ、何だか未だ誠の種子だから

涙多<sup>な</sup>とを<sup>し</sup>て泣<sup>な</sup>れでも爲<sup>な</sup>ると又<sup>また</sup>厄介<sup>やくがい</sup>になるだらう政<sup>せい</sup>さうでも  
 ありま<sup>す</sup>すまぬ何<sup>に</sup>にしてもまア○オホ、折<sup>を</sup>からか米<sup>こめ</sup>は器<sup>き</sup>上<sup>じやう</sup>り  
 の無<sup>し</sup>支<sup>し</sup>度<sup>ど</sup>解<sup>げ</sup>すがたに薄<sup>うす</sup>化<sup>け</sup>粧<sup>けい</sup>して出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>り莞<sup>わん</sup>爾<sup>に</sup>をわらひながら駐<sup>とど</sup>し  
 ろうに芳<sup>よし</sup>太郎<sup>たろう</sup>の側<sup>わき</sup>へすゝる可<sup>か</sup>愛<sup>あい</sup>らしさ綻<sup>はな</sup>びかけし海<sup>うみ</sup>棠<sup>たう</sup>の花<sup>はな</sup>の色<sup>いろ</sup>  
 氣<sup>き</sup>もほの見<sup>み</sup>ねて櫻<sup>うづ</sup>も桃<sup>もも</sup>も及び<sup>およ</sup>びなり其<sup>その</sup>美<sup>うつく</sup>しさに芳<sup>よし</sup>太郎<sup>たろう</sup>心<sup>こころ</sup>悦<sup>よろこ</sup>ばし  
 て何<sup>なに</sup>もなく始<sup>はじ</sup>め氣<sup>き</sup>なるを政<sup>せい</sup>は見<sup>み</sup>て取<sup>と</sup>りサア、参<sup>まゐ</sup>ったお春<sup>はる</sup>の  
 冷<sup>ひや</sup>ないうちにお米<sup>こめ</sup>さんろのお猪<sup>ぶ</sup>口<sup>くち</sup>を且<sup>かつ</sup>那<sup>な</sup>へお上<sup>かみ</sup>遊<sup>あそ</sup>ばしませ<sup>せ</sup>芳<sup>よし</sup>  
 政<sup>せい</sup>のお酌<sup>しやく</sup>なら一<sup>いつ</sup>ツ飲<sup>の</sup>うかオツト、こりやア波<sup>なみ</sup>々<sup>々</sup>だか米<sup>こめ</sup>一口<sup>いちくち</sup>助<sup>たす</sup>て  
 くんない米<sup>こめ</sup>ハイ些<sup>ち</sup>で御<sup>ご</sup>座<sup>ざ</sup>い升<sup>しやう</sup>を兼<sup>かね</sup>拵<sup>ぢやう</sup>にうけて一口<sup>いちくち</sup>のゆばお政<sup>せい</sup>  
 は嬉<sup>うれ</sup>しくサア、お差<sup>さ</sup>向<sup>む</sup>ひで後<sup>ご</sup>はお寐<sup>ね</sup>まで御<sup>ご</sup>座<sup>ざ</sup>るり召<sup>めい</sup>あがれ吾<sup>われ</sup>  
 儀<sup>ぎ</sup>も彼<sup>か</sup>方<sup>かた</sup>へ参<sup>まゐ</sup>つてお筆<sup>ふで</sup>や何<sup>なに</sup>かお銀<sup>ぎん</sup>さませうと氣<sup>き</sup>轉<sup>ま</sup>さかした茶<sup>ちや</sup>子<sup>こ</sup>  
 漬<sup>づけ</sup>これ<sup>は</sup>御<sup>ご</sup>膳<sup>ぜん</sup>のときのお茶<sup>ちや</sup>を小<sup>こ</sup>鉢<sup>はち</sup>をかへて出<sup>で</sup>てゆくとは二

人<sup>ひと</sup>がさしむかい芳<sup>よし</sup>折<sup>を</sup>角<sup>かく</sup>のお政<sup>せい</sup>のこしろ入<sup>い</sup>れだから猪<sup>ぶ</sup>口<sup>くち</sup>は取<sup>と</sup>たが  
 中<sup>ちゆう</sup>の猪<sup>ぶ</sup>で腹<sup>はら</sup>一<sup>いつ</sup>ばいにして來<sup>き</sup>たからまう止<sup>と</sup>さうぢやア無<sup>な</sup>か米<sup>こめ</sup>眞<sup>ま</sup>正<sup>せい</sup>  
 に何<sup>なに</sup>もいたゝかれませんは芳<sup>よし</sup>夫<sup>つま</sup>ぢやア此<sup>こゝ</sup>處<sup>ところ</sup>は彼<sup>か</sup>様<sup>さま</sup>して置<sup>お</sup>く米<sup>こめ</sup>ぢ  
 よつと嗽<sup>すす</sup>に参<sup>まゐ</sup>りたいけれど皆<sup>みな</sup>が折<sup>を</sup>角<sup>かく</sup>お酒<sup>さけ</sup>をたべて居<sup>ゐ</sup>りますを呼<sup>よ</sup>  
 のも芳<sup>よし</sup>自<sup>ご</sup>己<sup>ご</sup>が一<sup>いつ</sup>所<sup>ところ</sup>に往<sup>ゆ</sup>てやろう米<sup>こめ</sup>お寒<sup>さむ</sup>うお座<sup>ざ</sup>いませう芳<sup>よし</sup>夫<sup>つま</sup>でも  
 仕<sup>し</sup>方<sup>かた</sup>がねへと言<sup>い</sup>ッ、雪<sup>ゆき</sup>洞<sup>どう</sup>をともし様<sup>さま</sup>煩<sup>わづ</sup>つたひに出<sup>い</sup>行<sup>で</sup>しが程<sup>ほど</sup>なく  
 戻<sup>もど</sup>り芳<sup>よし</sup>サア、お米<sup>こめ</sup>まう言<sup>い</sup>譯<sup>やく</sup>の仕<sup>し</sup>やうは有<sup>あ</sup>めへ遊<sup>あそ</sup>口<sup>くち</sup>上<sup>じやう</sup>ばかり高<sup>たか</sup>  
 て居<sup>ゐ</sup>たが是<sup>こゝ</sup>で遊<sup>あそ</sup>やうとしても遊<sup>あそ</sup>さねへから左<sup>ひだり</sup>様<sup>さま</sup>思<sup>おも</sup>つて居<sup>ゐ</sup>る米<sup>こめ</sup>  
 ア、レ遊<sup>あそ</sup>は致<sup>いた</sup>しませんが何<sup>なに</sup>だかお氣<sup>き</sup>の毒<sup>どく</sup>で成<sup>な</sup>りませんからサア芳<sup>よし</sup>  
 何<sup>なに</sup>がヨ米<sup>こめ</sup>飛<sup>と</sup>だ間<sup>ま</sup>違<sup>ちが</sup>ひで先<sup>まづ</sup>頃<sup>ころ</sup>からの思<sup>おも</sup>はぬ氣<sup>き</sup>まゝ應<sup>おこ</sup>答<sup>た</sup>をわつか  
 し被<sup>お</sup>成<sup>な</sup>たたらうと考<sup>かんが</sup>へれば考<sup>かんが</sup>へる程<sup>ほど</sup>難<sup>がた</sup>しくつてと耳<sup>みみ</sup>もとを赤<sup>あか</sup>  
 くして俯<sup>うつむ</sup>いて居<sup>ゐ</sup>る悦<sup>よろこ</sup>ば子<sup>こ</sup>風<sup>かぜ</sup>芳<sup>よし</sup>太郎<sup>たろう</sup>は可<sup>か</sup>愛<sup>あい</sup>くなり存<sup>ぞん</sup>中<sup>ちゆう</sup>を撫<sup>な</sup>るその

折から逆りの方にて、接戸ア上下

お手が鳴から銚子のかはりめかど上ッて見たらば客が三人庄屋  
 鉄炮きつね翠とはむかしの宇あまり都々逸割烹店の混ざつを言  
 ひしあらんか然れば淺草廣小路の美屋の二階の繁占は大急大急  
 の観音まゆりに御利益をとく老衆あれば芳原がよいに煙草のい  
 ろけを演て夢中の息子あり芝居踊りか俳優のうへさに酔舞らん  
 する娘の子ありおのが隨意なるその中に此方の座敷の一むれば  
 坂倉芳太郎の店の伴頭勘七銀三といふ二人と中の奥の松村竹五  
 郎なるが酒と肴を真中にかき五徳圓居のひとく 登物宜いこと  
 ろでお目に掛つたから此樓へお引揚まうし願った通りの久張人  
 窓の辛い一けんお致の亭主忠兵衛通ひ作(一)が一昨年から新館の

出店へ往て居るので遠氣が紛み私も銀三も柳橋が鼻のさきと赤  
 て居るもんだから辛ばうの剣さきがアレサ勘はん自れったいッ  
 です何のかんのといふ可愛らしい猫もちやもちやたる所へ  
 り込せ温かい穴を穿つたの宜が帳尻へも又お話しをまたどはり  
 の穴をあけたので頭痛はちまきとはいふもの、且那のおよねさ  
 んに嫌はれたとかで根岸へ隠居するなせの真自在ゆゑ店御も投  
 やりを僥倖するは野となれ山尽しのナンッ、ナンで浮れて居る  
 と且那とお采さんの中は何様したとか時計の仮壁ちんく鴨の  
 味よい中となつた容子で根岸への隠居は私處の名物豆腐笹の露  
 とお取消し然て見ると店のとに身が還入から道奴あふない哩と  
 の塞ぎの虫の天窓から透た様な苦い便りは函館から届いた手紙  
 で遠からず忠兵衛が歸るそのと虫處でお煎火の雨ぬうちねと

此二人で相談を決し左様した事には抜目のないお前さんのお言  
 恵を借り胡麻かしが座を居とやりたいたので御座い升のう銀三  
 ん銀七が話しす通り次第惚られたのが身のつまり何と  
 か御工風を願ひ升竹そりやア僕も芳さんにやア内股で君たちの  
 世話にもなり又一所に遊びも為たもんだから本所の火事で運  
 とはいと餘所に見て居るわけには往ねへが二人で五百圓足らず  
 とは些重荷だから軽卒な事ぢやア追附やすめへせとまばらく考  
 へ一人點頭竹僕があくまで運て見るから君たちも積真押をしめ  
 て掛りたまへどうせ尋常ぢやア仕掛がつくめへと言ひながら積  
 口を取つてぐつと飲はし勘七に差し竹雨君の御依頼はしつか  
 腦へ染こましたが僕の方にも少し聞きたいとの有は僕の家出中  
 に芳さんが僕の山神左衛門を替て居たらうとの疑圖だが君等は

如何思ひたまふ銀小僧の御供が昨日も小の郷今日もなかの郷を  
 いふ様だからこいつは真い中の郷まんざら只の中の郷では無ら  
 うと他でも岡やき妹婿もち岡をして居ましたのサ竹でありやせ  
 う夫りやア離縁に成た後のとだから何を仕様と理屈は申し伸ら  
 れねへが今また家へ歸り元の箱に納まつて見ると何となく小僧  
 に隣る譯附てはお米さんサ先頃芳さんが僕の家へ連れて来たを見  
 たか何處と云て我輩如きの悪口にも點の打ねへ美しい女こんな可  
 愛らしいのをと思つたら馬鹿な話したが珍元からぞつと爲て置  
 々と總身が寒けたつたは懸風でも引たのか夫にしちやア草草が  
 出ねへと考へた位どころがお米さんの方でも僕にと言ふと何の  
 と笑ふだらうが其處が人情とつちに無心が有馬の屋敷なら向ふ  
 にも水天宮の心ありしは目の電信で見てもつたが芳さんと云ひ

お千世と言ひ油断をしねへ奴ばかりだから高嶺の花を見すことも  
 ては仕舞たがお千世を芳さんに借りられた腹巻にお米さん何  
 様でも此方が貸て貸ふつもり君らの帳尻の穴は僕がたしかに理  
 るからお米さんの穴理の手つだひハ御用所よ乾と伊願モハ  
 ハ異なるもの思案の外とはこしらを言たので有うやと聞て二人は  
 呆れ顔目を見合せて居たりけり

第十三回

管町の坂倉では芳太郎とお米の中昨日にかへて睦まじく是を  
 那人に見せたなら天に在ば比翼の鳥地に在バ逆理の枝あなた  
 山好べゑありませうと言ひ是を熊蜂社会に評させあハ恐天さま  
 の表纏りめエハン骨がなければ一所になりてへ杯を言やハ  
 だらう。チヨツ堪まらねへト言て羨ましく思ふはせになりしかば

母か萱のよろこび言んかたなくお政は髪のかへらぬ内記とお  
 に勤め一家親類へ相談して黄道吉日をねらみ表向に目出度結婚  
 を結ばせたり借また中の郷の梅村でも竹五郎を元のごとく呼戻  
 したは全く芳太郎が財を借ます竹五郎の不始末をつくろひ呉し  
 情ゆゑなりとお千世親子はよろこぶより倍坂倉を親しくし親戚  
 の如き中となるも竹五郎はお千世と芳太郎の容子を探りお米に  
 近づき親まんの心より猶幸ひに是をすしめしによるならん然  
 れば竹五郎は日毎のやうに坂倉へ来り母か萱をはじめ家内の者  
 とみな心安き中となりたれどお米は芳太郎から竹五郎は呆るゝ  
 程の女好き特に中の郷へ其方を連れて往たときのお米の其振り  
 うも只お米は思はれねへ家へ来ても成ったけ外して遇ねへ振りに  
 だが宜からうと言れて居るので竹五郎が来るお米の子倉へ



ゆかねば竹五郎の目的ちがひか米の額を見る事は五度一度六  
 せに一ごのみならず芳太郎には死もいとほはぬはせ惚て居る仕  
 なしなので浦山しく嫉妬に胸のはむらは燃れど是といふ手段も  
 なくて日をおくり其年もまた暮つお米は十八歳の春をぞ逃へけ  
 る茲にまた静岡縣管内遠江國相良近ばうの山より石炭の油わき  
 出るを此程見いだせし者ありて芳太郎は其とにつき彼の地の者  
 の細みを請かつ別に鑛山の願ひなせも有により二月の末に至り  
 駿州静岡まで往ねばならぬ事出来し射ら其仕度をなしけるに  
 米は暫時の間の別れもかなしければ是を苦にし三度の食さへ常  
 の様にはすまぬを見て芳太郎も氣にかけ「お米何改うんなに  
 塞ぎの虫で居るのだ血の道でも起しちやア困るせ米「なアに塞ぎ  
 はしません芳「うれちやア何様したのだ米「何だか哀しくていけま

せんワ「芳「往昔とちがひ今では歐羅巴だの亞米利加だのへ往人さ  
 へ有では無か夫に一年も二年も掛りはしまひし長くつて二十日  
 もたちやア歸るのだ旅の留守家へもごまのはいが附と言ふ狂句  
 があるが水性もせず煩ひもせず待てゝ異なナ米「左様だけれど雨  
 でも降たらもつと日數がかかりませう芳「二日や三日は延るかも  
 しれねへのサ米「成つたけ早く歸つて来て下さいましナ「お前が  
 左様いはねへでも間を取居られるものか夫に只の体で無なつ  
 たと言ふから猶の事だアしかし廿日も留守にして歸つて見たら  
 脹れ様が目になつて来るかまらん米「モウ否で御座いますねへ然  
 があの木魚講だのぼてれんだのと言ふのは何のと「芳「木魚講はそ  
 の先達が大きな木魚の紐を首にかけ木魚は腹のところへ下つて  
 居るその木魚のふくれに見立たわけばてれんは布袋で布袋の

腹の脹れたと同じ連中といふと「米」オハ、ハ、夫で左様ですの  
 で御座い升ノ芳早く産してその赤坊を慈母さんにか目に掛てへ  
 ものだヨのう「米」お出立の日がいよ〜と極ってからは取りわけ  
 夜が短かく成たかと思はれ升ヲ「芳」夕べはまんぢりも仕ねへの  
 強氣に眠くなつたまう横に立うちやアねへか「米」アレお寐では往  
 ませんよ「芳」能いぢめるの「米」夫でも何だか些のあいたの別  
 れでも哀しう御座い升もの「芳」意地の悪い子だせ残り多くなる  
 襟に斗りすらア。オヤ其處に針箱が有の一寸出しな前が手を此  
 赤い絹糸で斯結んで置から自己の手を白い糸でお前が結いてお  
 きな互に心が變ると此糸が切るといふと物は試した返て見な  
 と譯なき千話に夜は關てしのゝめ近く成にける

第十四回

富士の白雪や朝日でとける解て流れて三回へいちて三馬女  
 ゆの化粧の水「ア」ンエ、ハ「ア」丁とれ半とれお三八床とれ朝黄の  
 政屋かへごつこい〜「昔」やつた丈あつてさすが勘七せん旨いも  
 んだ二子山の下へ行と一杯飲せるせ名物の甘酒を酌なれども  
 三さんの坂は照々鈴鹿はくもるあひの土山雨が降るエ、とびふ  
 馬士唄にはかなはない併函根山も君が馬を引た時ふんさ遠ひ大  
 名の下り上りが無から淋しく成たが道は平で樂に登れるよな  
 ア勘「ハ」に〜君の長持をかついだ折の事を思ふと八里の峠は遊  
 蕩息子がまた今朝がへりの敷居よりやア低い様だアハ、ハ、と  
 互ひに悪口さゝ合て函根山を小田原の方より登りかゝるは後  
 須賀町坂倉の一群にて芳太郎は駿州前岡迄往ねばならぬ事でき  
 て番頭勘七を連れ登所ばたらきの横吉に小さな雨掛を荷はせま

た銀三は我が引うけの見せ用にて人磯宿の行意へ引合あるを以て芳太郎を見送りがてら往んと言ふゆゑ是をも伴ない些の別も哀しみて出しともなかるか米を給し一昨日家を立山し其夜は戸探へ泊り夕々は小田原に暮今朝此所へ來かゝりしにて銀三は箱根權現を齎て信じんなし居るゆゑ昨の宿までお戻りまをし片に参拜いたし度とにより其望に任せしなり因て勘七と銀三は歩行といふ芳太郎に登り坂の難儀を説て早川橋より無理に駕籠に乗せ二人はかこの後に成り前になり雨掛もち權吉の率領しなから口から出放題調子はづれの謡うたひ他の笑ふも旅の取はかきすての本文かけかまひ無いが氣散じと聞き流しにする芳太郎は駕籠の中から山の半ふくより突出して精落んとする磐石ハ鏡みし蕨の壘の糸もて止たるか峯の絶頂より噴起して既に天へ登

りし雲は天狗らが會議にくゆらす煙草の煙りにてはあらざるし人造の及びがたきは深山の風流なき歎賞し遊近をうち録めつ、行うちは何時しか供のものを行越し畑の町と二子山の麓との半ごろへ到りたり此時駕籠昇ハ万尋の谷に菰みし岩の平みへ駕籠を下し甲モシ且那些ばかり此處で貸て遣ておくんねエヤしく一人前五圓づもありヤア宜んだアト聞て芳太郎ハア此奴らハ揺なト思ふより風に柳の和らかくなる程この輪組ぢやア骨が折やう金は後の者に持してかいたからまア待て居なせへ此處へ來しだいに出して遣るから甲棒組それぢやア一服やつて居やう乙十雨や甘雨は腹鼻禪にもねぢりこんで有だらうにハと古ながら早附木とり出しガリと火を出す其ところへ勘七、銀三みひ附來れば駕籠は敷から棒に、オイ何方が金を持て居る且那のみは

せだ此處へ出しぬへ「何だ金を出せと甲知れた事よ」此奴らア  
 喧嘩しかけの退利だナ乙何だとイヤ洒落たを吐しヤアがるよ  
 勘七の横面を握り拳で一ツなぐるを勘七も又驚籠身をぶちのこ  
 す驚籠身の棒組も銀三も助太刀に飛かより「已此野郎の強みある  
 芳太郎は呆れかへり烈より出んとする時しも殺して仕舞とこ  
 かけて手拭で顔を包み目ばかり出した一人の賊が抜身の刀をひ  
 らめかし松の蔭より飛出すに勘七銀三足はどかどろき迫るに  
 にばつたりと誰やら怒へ突當れば怒もろとも芳太郎は岩の上  
 より底知れぬ谷へ遙かに落入たり此時後から登りきたる雨掛は  
 の權吉を見て「己も殺して仕舞ぞと賊は刀を振りあげれば權吉  
 ぞろき「キヤツと言ッ、雨掛なげすて逃去るを追かけもせず此の  
 賊が「ヤレ御苦勞と言ひながら刀を納めて手拭とればこれ梅村竹

五郎にて勘七銀三と顔見あはせ三人ともは驚愕わらひ竹  
 落た者の出た例をさかぬと言ふ底の知れぬへ此谷あひへし  
 く「さア骨折だと懐中から金とり出して驚籠身の二人に「コレを  
 投遣りたり

第十五回

坂倉にては芳太郎が駿河へたちし日の夕ぐれに品川まで見お  
 りし自他の大せい動や々々を語りきたり駿洲の川崎屋にて一  
 いたいき私しきもは跡にのこり且那はよい御機嫌にて御足と  
 我がちに祝して歸ればお米はとさら此お米もよろこび子飼から  
 の番頭勘七が供してゆき銀三もまた大磯とやらまで一所だから  
 少しは特みと噂して三度の食の陰謀もお米は人の手にかげずお  
 歸りの有までハト神を祈り佛をねんじ煙草だちやら茶絶やや

進しての信心に夫の無事をねがふのみ一日を暮すも千載の心も  
 ひに沈む第五日めの朝番頭勘七が顔いろ青ざめしはくとして  
 踊り来り銀三も函根の峠までお見送りせんとて一昨日の未明に  
 小田原驛をたち山へかゝり旦那は襦袢に召たるところ此峠に  
 強盗なかまの追落しで畑の宿のさきの一番淋しい坂へかゝると  
 山賊が七八人だんびら刀を抜切て出ると自身も一ツになり旦那  
 を剝にかゝりましたから私も銀三も一生悲しいつらと戦かひ  
 私しは御覽の通り顔を打れ目がくらんで其處に尻餅つく銀三は  
 勢ひよく拒ぎ其奴らを旦那の側へ寄附ね棒にしてぬるを横か  
 掛る賊につき飛され浪除足もと旦那の乗た驛の上へ倒れかゝる  
 と轡も旦那も銀三も谷へ一ツに落こんだからハッと思つて立上  
 るとき山を下り来る大せいの道者に賊らは驚いたか元出た林へ

逃とんでそのまゝ何處へか往がたまれず夫から向にして旦那  
 様のお往へをどぞんじろの谷を覗いて見れば途中に細びく装か  
 すみ水の音さへ聞はぬ深さに拘りし谷への下り道もあらうかと  
 其處ら四邊りて尋ると昔しから見たと言者を聞ぬこの谷そこ  
 狼でも落こんだら出た例のないところと涙ふきく眞とまやか  
 に話す最ちう雨掛もちの権吉も踊り来り抜刀にて近れ雨掛なげ  
 すて逃たれど旦那様や番頭さんがたの御容子も分らず夫ゆゑ  
 の宿の人をたのみ取て返し元のところへ往て見ると思て逃た  
 掛ははや無なり旦那さまも番頭さんも何處へかいでやら峠の  
 へまでまぬりお尋ねししても御容子が隠らぬゆゑよんせとるな  
 く其事をお話しし上やうとぞんじ夜通しに歩行てまぬりま  
 たが勘七さん旦那もお歸りになりましたかお前さんのお顔を見

てまア安心と大息つきつゝ汗を拭へば勘七はうらやまその罪  
を今あらかたお話し申したのだが其泥棒らを喰ひついでと思  
たれど送られたのみならず且那のお死骸銀三さんの死がらをも  
見届けるさへ出来なぬ悔しさと権吉が其の話しの尻尾についで  
の偽愁歎お米は只々肝つふれ餘りのことに涙も出さぬは「何  
せうく」とばかり途方にくれたる母娘はてり泣伏正体なし折か  
ら芳太郎の留守見舞にとて来りたる梅村竹五郎これを見て勘七  
と権吉に委細を尋ね目をまばたき吐息嗚のみ腕をくみ取をた  
れ雲時ことばもなくありしが「竹定めがたいは人の身のうゑま  
れど勘七さん且那や銀三さんの落た谷底を見とけられたはな  
し何様な處だと言て金せへ掛りやア往れぬへ事は有やすめへ夫  
に此大變中だからお心附の無は御尤だがお家に取ちやア御願の

一作もすてゝは置ねへわけ誰ぞ一人あつちに且那の顔を知つ  
た者のないを僥倖且那になり代つて静岡の御用きしに往き第一  
にはさうせ通り道杣狩人を雇ひあげても谷底をさがし生死を確  
にせずは置れやすめへマア慈母さんは何様思しめします「是り  
やア成程被仰通りだモシ御隠居さま誰彼と申さうより御遠慮で  
も万事になれた竹五郎さん静岡の御名代も函根の谷の森も  
ふ事を被成ませアノ竹五郎さん何百兩かいらうとも金にいとめ  
は附ませんから主人の生死をしかど伊見届け下さいまし私もお  
供じて参り命の限りは働き弁と言つ、竹五郎の顔をしるり見れ  
ば竹五郎エヘン

第十六回

梅村竹五郎は番頭勘七と調子をあはせ信實しやかに言ふはかに

お登は元來頼母しく思つて居る竹五郎の事ゆゑ函根の行の身さ  
くど静岡の用を任せければ竹五郎は芳太郎の身の成往きを尋ね  
る入費として路用の外に三百圓の金を請とり難にあらひし場所案  
内に勘七往事と決し一刻も早いがいとて其日すく出立なした  
りお米とお登はかなしみの内にも竹五郎が往て谷のうこを探し  
たら万に一ッ芳太郎が死あすに居るとが有うかと思ふより且に  
心をなぐさめあひ夫が便りを待たるに幾日をふるも音信なきは  
其穿さくの届かぬかトお米は取りわけ泣しづみ只一飯の飯さへ  
も三度毎には食しかねたり斯て十五日めに竹五郎と勘七歸りさ  
たり函根の谷あひは芳太郎さんの落入りしところに限らず相模  
伊豆の袖獵男炭やき男まで百人あまりを雇ひあげ六日も七日も  
探したれど夫かと思ふ跡さへ知れぬは彼の谷底は川のみさも

とに成で居て水浸をたる急流なるゆゑ若しも流れて往はせぬか  
と袖や獵男らに言れ詮方つきうの脚を申して上やうとは思つた  
が悪は延るの壁へ違さかるもの日々うとしたから先々と思ひ  
猶穿さくをところの者に待み戻りに寄からとて静岡へ住きぬ地  
らの御用は万々上首尾これほり大金儲の藝はまつかり鐘ん  
で来やしたと何やら立派に書たてた奉書の紙をそこへ出し是は  
慈母さんに渡ししややす夫からまだ歸りに函根山を穿さくした  
が盗賊にみひせん芳太郎さんを無した上に三百兩の金は應も  
さす遣ひはたしお氣の毒の上のおきの毒芳太郎さんはおの善い  
人が彼様した事にならうとは神佛でも存じ有まひと勘七頭と  
も涙をふきく物語ればお米もお登も侍の綱きれ只泣ふして一  
言のものをおさへ言得ねば静岡の附書などは見むきもせぬ故竹五

郎は二人をながめ竹勘七さんか二人のか敷き何事も手に附ぬのは  
は浮尤だから君がよく始末をしてお上なせへやし候はつた事  
を一寸家へとわり直にまた出て来るからモロ慈悲さん貴方がし  
つかりしねへぢやア成ませんか米さん何事も約束だ煩ッぢやア  
詰らねへ然ハ言ふ物の僕もなみだがト言ながら指のはらにて目  
を拂ひ龍鐘として出往たり

竹五郎は勘七銀三とはかり芳太郎を庇しれぬといふ箱根の谷  
へ落しけれ雨掛もちの權吉をかひ走らせ雨掛を奪ひとりたれ  
ど金は芳太郎が懐中にしたるが見へざるゆゑ三人ともに失望  
し猶謀りて芳太郎を尋ぬる入費と号け三百圓静岡の諸入費を  
百圓うけとりその四百圓をもち竹五郎勘七は神奈川まで往と  
此處に銀三待ふり三人して横濱の遊廓にいたり居つ々々の並

びをし或ひは江の島鎌倉金澤なごに目を惹し銀三には百圓を  
別にあたへ此金にて何方にか隠れ遊びをるべしか米さへ手に  
入れば沙汰する程にうの時いで来て落入たる谷まの水にかさ  
れて遙かの麓へ流され湯本の橋の杭にかかりしを村の者に引  
あげられ命は助かつたが當ふんは大病人となり夢中で遺し此  
程やうやく全快したから歸りましたト言はば後は竹五郎勘七と  
で胡麻かして仕舞といふ手はずにし又静岡の吾附なりとて出  
たらまへなるものを推へ函根へも静岡へも往ずして戻り來り  
しなり此とき通ひ番頭忠兵衛は函館よりいまだ歸り來らずそ  
の姿も政も先頃より病氣にて打臥をり芳太郎の實家はなふた  
れば別にちかき親族なくか米は賢き生れなれども世間見すの  
世に子うぢちぢぢとて世帯の外は知らぬうへは二人と



も深き敷きに度を失へば何をしても尻の割る氣づかひは無  
 思ふところより三人よれば文珠の智恵わるいはうにはぬか  
 のなひ竹五郎が探りにて勘七、銀三は悪をはたらく木偶人形と  
 はなりたるなり

第十七回

坂倉の親子は竹五郎がすしめに任せ大金を費し函根の谷をさが  
 しても芳太郎はまねぬとに今はうの落し日を命日と定め表向  
 は猶旅中のていなれを三度の食の陰膳にかへて香花たむけの水  
 が涙の雨の源となり泣あかして終にお米は床に臥たり竹五郎は  
 朝夕にとひ来て母お蓋に力をうへお米をなぐさめ論し實を盡  
 すが如くに見せまた勘七の一番取なるゆゑ口には慈心か氣  
 の毒と言へどうのする處は口増に私し多しお米は慈しさをか

た無れど又思ひかへせば夫の形見を身にやせし我身が斯ては母  
 の歎きも一入ゆゑ早く丈夫になり赤坊をも産み母のころをも  
 易くしたしと疲氣を取りなほし勉めて食なぞ致しければ此程や  
 うく床をはなれ些の用は出来るを以て涙の種とは思ひながら  
 其儘に幾月も乗かきあれば芳太郎の書齋に入り袖をぬらしく  
 手道具なぞ片附て居ると何時の間にか竹五郎が来てお米さん  
 大分しつかりして来やしたと云ふに振りむき「おや桐りいた  
 しました竹せつ角些いとところだ思ひ出す様なこたアさらべ  
 として氣を轉じるが肝心もう今日は芳さんだつて極樂の東門あ  
 たりに世帯をもちそろく水性を始めたじふん死だ人は仕かた  
 が無としてお前さんの事になら雨にも風にも厭ひなく實と誠の  
 身代かぎり盡してかゝる僕の心は何様いふところからで有るか

と少しは察してと言ひかけお米の顔を惚々見ながら「オヤ此處に火がありやすね、煙草を吸つけ、憂へを合んだ美しき雨をかびたる海棠の花とは今のお米さんを見て、言たことだらう米、アレエもう否で御座い升よ、竹、お前さんは然ありやせうが此方はしんから底から好、イヤ何思あんの、外の垣根ごしにも只の一度なり嬉しいお詞を戴きたいと願望するのは無理であらうが打て附に言れるまで素知らぬ顔とは情をえつた所道とも思へぬ思にかける譯では無が芳さんが彼様なつたとき僕が静岡へ往なければ、私しごとの譯で無へから此家も大かたは潰れもの夫れゆゑ芳太郎と名のり彼地は十分にしおはせて来たが、一ツ間違ひ低者と露、すりやア十年の戀役ぐらぬは物いひす其危ふさの厭ひもなくつくした義務も魚ごころあれば水心あるはまア當然と思ふからの

と併今でも名のつて出て自訴すりやア此家を潰すのは朝敵めへの仕ごとサ家を大事母を大事腹のなかの子を大じと思ふことろは有りやせんかサと言れてお米は呆れはてしが悲しき悔しさおしつゝ「米、お千世さんと言ふ立派な御新造様や、お子まで有ながら御申儀も事によります、竹、然外したつて左様は往ね、僕が内氣な生れたとどうに戀病となり焦れ死をして居る時分でも有うかエお前さんが初めて中の郷へ来たとき、一目見るより忘れぬ最惜しさ是まで藝者かひ姫妓かひ圍ひ者小娘後家人の女房の撰りきらひなく色事をして来たが命を棄てもと思ひこんだは今度かはじめて併芳さんと言ふ惚あつた中の夫のある身一通りや二通りで承知は有めへと思つて居るうち芳さんは函根の災なんも、う、憚りのねへお前さんの身の上詰と言てくれりやア是が女の打

せめ芳さんとも何様やら情合があつたらしい水島へお千世は  
 子供をつけて再びへけさらんば又これ程わけをいつてもお  
 前さんが横に頭りをふり通しやア仕力がねへ一度死やア二度は  
 死ねへ情死した氣でお前さんを殺し僕も其處で死ばかりと言れ  
 てお米は悔りし夫の後を追かけて只でも死たく思つて居れど孕  
 つてより九月腹の子を産みおとし芳太郎の種を殖したさ母を案  
 じるの心より何と答へもあし衆ッ差備きて居るを附こみ竹ッ  
 夫はさまで思ふ僕こらへ袋の口がやふれ言ひ出すからは否と  
 か應とか確りとした挨拶をせうぞ聞してお呉なせへ美しく可愛  
 らしく生れて来たのをお前さんの不運氣障がる人にこれはさま  
 で惚てしまふは僕の不運出雲の神の報じりに合ねへ仕とををし  
 やうと思ふハナ氣の揉たものだよねへ

第十八回

お米は涙のみこんで悔さ紛らす笑顔の愛さやう私しの様なもの  
 を夫はせ道に思召して下さひ升のが嘘で無れば其加にあまつて  
 勿体ない世の中には二度も三度も夫を持人もあれば道に背いた  
 と言ふ程では有まいからうれば宜が芳太郎が病氣で亡なつたら  
 心變りの無やうに看護介抱もいたせる故断念も宜う浮塵いませ  
 うが思も掛ぬ非業な死にはかない別れをして見ますと日がらも  
 立ぬ中に男ぐるひハ心で心に谷められ他は知らねと氣が済す特  
 に孕した芳太郎の種も直き臨月で浮座いますから此子を産落  
 したらへ何様とも御返辭をいたしますから夫まで何卒かん忍あ  
 うばして下さぬと事を譯たる詞のうち少しハ味なところも有  
 なぞ思へハ此上強く言たら却て害にならうかと惚た弱みと已

で愚弱々々となり點頭ながら竹なる程然聞て見りやア無理でも  
ねへから今が今とも言れぬへ身体を二ッにした上で狂言の言辭  
なら色よい返辭とはべるやつを待てをりやす先夫までは此方も  
命があるよ云ふもの女の美のは罪だよなアとふ米の顔を見詰て  
\*ツと息つくとき母の聲にてお米とよばれお米ハ唯といらへッ  
、米夫では竹五郎さん何卒うれまで堪忍してト言葉のこして  
立て往ば竹五郎もひそく見世の方へぞ出往ける斯ればお米  
は哀しきなかに又一層の苦を増しこの事を母に告たら内外にお  
氣の揉るところへ餘計なあんじを掛るばかり黙て居て腹の子  
を産おとしたら其子を母に持みかき海川へ身を沈め夫のあとを  
追かけ未來とやらへ往て添んと心やうやく定まれば母の側に居  
るも暫時のうちと思ふゆえ傍を片とき離れぬ様になし「アノ慈

母さんエいつぞやお説きやうで聞ましたが生者必滅命者定運と  
かで先だちますも後に残るも前の世からの約束事とやら眞に生  
てぬる者は必ず滅り命者は定つて離れねばならないのが要世で  
御座い开とねエ母夫はお前のお言の通り何ととも皆はじめから  
定つて居るとの話し吾儕もお父さんと若い時から中よく添ては  
居たれど子がないうえ芳太郎を貸ふとお前が出来たので芳太郎  
は吾儕の心をさつし何程すゝめても他から嫁を貸はずお前の氣  
まゝを騙しすかし婚儀もすんで身重になつた吾儕のよろこびう  
の嬉しさに引かへて芳太郎の變死はんに豎ありと思ふところの  
あだ櫻よるは嵐の吹ぬものかお前はまだ花にたとへば萎なれ  
ど今日となつては散たも同様孝心ふかい芳太郎にとり残された  
吾儕もお前も因果のよりあい何卒お腹を大事にしてろの子を産

み健康にうだて、芳太郎だと思ひこの家の跡をとらせぬ前も若太郎の厚いなさけの返禮に探をまもり後家を立亡人の菩提をふを母一に心がけたが宜からうと言ふ、結しさを有がたさに思はず知らず身をすゝめ「慈母さん有がたう御座い升もし貴母が二度の御養子を貸へと被仰かど夫が苦勞で成ませんでしたッたワ母「百年も二百年も生て居られる物ではなし可愛い娘に探をやぶらせ人にうしろ指をさゝれるを見て快いものか何につけても芳太郎が不惑でならぬアアもう思ふまい、くお前の泣を止めやうとはせず一所になつて愚痴をいひ出しては佛を迷はせる様なもの夫よりかお米や佛檀のお香がたへたで、無いか开してお前の冷ない様にするが宜い噫なむあみだ佛彌陀佛と目をしばた、けはお米はせきあへぬ涙のみこみ「米はんにお香が無なりううたト立

第十九回

は目もとの濡ひを母に見せし氣づかひなるべし斯る悲しみに引かへて竹五郎は産さへ濟ばお米は我もの心好く道がま明神のお守子安地藏尊のお札なご、日毎に持來て安さんを待の思の得て勝手しんせつ顔の世話もうるさく成りたけ外して居るうち立日の早く臨月來て玉のやうなる男子をばお米はやすく生みおとせり

案じるより産が安いといふ壁へ空しからずお米は男子を儲ければ母お萱のよるこび言ん方なく芳吉と号け手の中の玉かさしの花と愛ければお米ハ我子の可愛さまた母の悦ぶ顔見るは嬉しけれど夫に附ても芳太郎のとの思ひ出られいとい悲しき心も知らず竹五郎はお米が安産したならば何様ともならうと言ひし故

既に我ものゝに爲たりと思ひ日々見まひに來り朝から晩まで去け  
 込みて動かねば夫を見ろの聲を聞く悲しき悔しき死より外に手  
 段はないと思ひても母の歎きを案じ我子の愛にひかれ流石に死  
 なれもせず右やせん左やと心ひとつに苦しめば産の輕きわりは  
 は日立悪く夫に附ても函館に在る忠兵衛も歸るとの沙汰はあり  
 たれど如何なしけん此度の凶變を告やれど猶歸り來らずお政は  
 生憎いつぞやより不快にて問ひ來ねば力と頼むものさへなく只  
 竹五郎が否らしき目顔を見詞の謎をさくも五月纏うつくとし  
 て産所にありしが此はさお政の病氣やうやく全快してお米が男  
 子を生たるを悦び芳太郎さまのお形見なりとて來りて居るとき  
 は些の間もろばを離れず大切に守ぞだてればお米は悦び少しの  
 心落居るを以て何時まで斯てあるべきと思案を決し人の見る目

は忍ぶものから探は角な硯箱硯の海のふかしれを思ひし契りの  
 我妻のばき折のせし墨の如もとへ返らぬ盆の上の茶碗の水に播  
 うふる涙に袖のまづ濡てにじみ勝なる巻紙へ悲しき堪へて唯筆  
 に書のことすはお政への頼み狀にて竹五郎が言ひしとをうのまゝ  
 とおとしよられた母さまへ芳太郎のとのあるうへに又お歎きを  
 かけ西も東も知らぬ芳吉を父親のみか母までもない孤にしし出  
 るは死にも勝る悲しきなれど破らじと思ふ女のみち家に在りて  
 探を守らんとすれば竹五郎が殺すと言ひ又芳太郎の偽者となり  
 静岡へ往しとを自訴して坂倉の家を潰すなき言ひ兎ても角て  
 も世に棄られた我身なれば芳太郎の菩提のため何れの寺をか  
 待み尼となるなり其譯を打明しては迎も母さまのお許しは有ま  
 い然て見ると竹五郎が何を爲いだらうか知れぬゆゑお話しを申

し上ずに出るなれど待む伊勢寺が定まり身の落着きまだい早速ふ  
 を上るから母さまお察し下さらずお前も何卒案じすに母さまの  
 お世話と芳吉の事をくれぐれお持み申します必々死なぞといふ  
 様などは致さねば書を上るまでは其儘人に知らさず伊勢おき下  
 さる様にその事を詳細かき遣し芳吉が宮参りなれど芳太郎の演  
 慮あれば心ばかりの内祝ひをし見世の者も勝手なれども時臥した  
 るを僥倖に環て準備なしかきたる粗服を着當ふん事の足りるは  
 金の金をもしち庭の切戸口より抜出せしは其月も真夜中すぎに  
 て有りけり家内の者はこれをえらす翌日になり例もお米が起い  
 づる刻限より二時間あまり過たれど音さたなければ訝り侍女お  
 車がゆきて見るに夜具は寐たましなれど主はなくして硯箱の上  
 に一通の書あるゆゑ表書を見るとお政さま米よりとに頼りし書

第二十回

雪隠など探してもうの往方の知れざれば昨日の宮参りにてお政  
 も泊り居るを幸ひお米の遺しおさし書をお政に渡しお政が書を  
 よむうちにお書は斯と聞き狂氣の如くなり共にお政と書をよ  
 み泣より外に辞なく終に家内の大騒ぎとはなりたりけり  
 却説お米はもの本や人の話しにて知る鎌倉の尼寺をあてに我  
 家をやらく抜出たれば環て夫の落入りといふ谷は函根山の  
 畑宿の先となれば追てもの心ゆかしに其ところへ往て見ん夫に  
 は十分恩を請ふがらうの人の亡を伴儀にこの身を淫まんとする  
 竹五郎の不實また勘七が此ごろの容子心得がたき市のみなれば  
 二人の言ふとばかりにては心済すと思案は雄々しく決して月  
 は雲間にありながら往さき暗き夜の道うとか此處かと踏まよひ

辻の行燈は夜明しにあきなふ茶飯に蕎麥うん縛それさへ引て  
 々々淋しさ添ふる犬の聲火の用心の拍子木も今ははるかに落の  
 びて日本橋通りへ出ければ怖いながらも少し心が落つくも又思  
 ひ出す母の我子のとに胸迫り泣じとすれを袖ぬれていとと露  
 けき曉の鐘聲々ときこゆるをりから馬喰町を早立したるが横濱  
 見ふつの田舎道者ひとむれ来りけるゆゑか米は嬉しくうの後に  
 つき宜きに言ひ拵らへて彼らの中に打雑り幸うじて四時ごろに  
 神奈川の宿まで往と田舎道者は宮の川岸といふ所より船にのり  
 横濱へ渡りしゆゑ再びひとりととなり其處にやすみ此處に腰かけ  
 足の疲れを厭ひく往はどに程ヶ谷と戸塚の中ごろで日は山の  
 端に落入たるゆゑ心淋しさを限りなく暮ぬ内はさきの宿まで往た  
 ひと思ふも足のすゝまぬ折から手拭にて顔は包めを衣服立派な

男が来かきりお米を見て立せまり何やら頼りに考へたりしが打  
 點頭きてゆき過ぬか米は夫とも気がつかず急ぐとすれを身体つ  
 かれ道はかきらねば忽ち地は日は暮はてし宵時の黄昏酒と成たり  
 けり折から後より息せき来るは今通りすがりし男にてか米に聲  
 かけ「モッお前さんは此淋しいに今ごろ一人で何處へか出被成の  
 で御座へやす米ハイ此先の宿まで用事があつて参ります男夫ぢ  
 やア私も戸塚まで往のだから速て往て上やせう然がまだ餘ばき  
 遠へから其處の出茶屋のあとで一服やつての事とかしなせへ米  
 ハイ有がたう御座い升がちと急ぎ男然言たところか歩行た事も  
 ない夜道ここに淋しいところを何様して一人て往やせうぞ夫  
 よりかまア此處へ這入ッてとか米が手を取り無理に出茶屋の跡  
 へ引きこみ探て谷子を知りたるか眞黒暗を手探りに貸へ腰を掛



させて男時にか前さんの家は東京の須賀町米二、男いやさ  
 き給ふな豫て私ちも首ッたけ法蓮華經であの川ばだの祖師さん  
 へ日に千遍のか題目唱へて願った思ひが届き南無妙ふしぎなと  
 ころで進たは日蓮菩薩のお引きあはせで大僧正行尊の歌へも  
 ろとも哀れと思へ山さくら花より外にしる人のない此山みち  
 聞ても無れば見ても無ゆる浮名の立せわもない夢の様な扱徳な  
 しの契りを此處でと引寄せられか米は怕り突のけて逃とするを  
 と捕へ男些のあひだの辛抱だろんなに否なとでもなからうと無  
 理にひき据系押倒すをアレへと断たて突除れを女の力手弱くし  
 て終に霞へおし伏られ連れ難なき真先へさし附て出す提灯に男  
 は桐り飛のく拍子ぬげる手拭うの顔見て米北方の象三トいはれ  
 狼狽あはて片足騎下駄かた足しはだし膝ひきて逃ゆきたり

此とき提灯を出したる男阿やどうち笑ひ後見かへり且那のふ  
 し通り矢の如くに逃て往たから強淫先生にちがひ淨せへやせん  
 「アッ、棒組いやに洒落るな折から彼方に下した籠籠の中から六十  
 余りの男徐々たちいでか米にむかひ事の譯を聞ゆあか米ハ嘘と  
 實を程よく話し危き難をのがれし禮を厚くのべ鎌倉の尼寺へ参  
 りたければ戸塚とやらへの道をか教へ下さりましと老人點頭  
 「夫も教へて進ませませうなれど若い女が今ごろ一人で何様して戸  
 塚まで往れやう殊に大そう勞れた容子私が宜い様にして上る程  
 にこの籠籠に乗てお出なせへと達ての心切その善悪は分らねど  
 差向た難を救はれて見れば否みもならず心かきく籠籠に乗れ  
 ば橋身は肩を入れ立ちとして「イヤ何か足に踏ると思つた今の如  
 が泡を喰ひ落して往たを見ねて紙入だった

お米は老人に助けられ駕籠に乗せられ何様なるとか情さ覺束な  
 さは限りなければ今さら何と詮すべなければ昇往れるまゝに三  
 里余も来らんと思ふとき鄙には稀な門がまへの家の門邊に轡を  
 下せば老人が「サア」此處が私の家鎌倉の尼寺へ往たくハ手續  
 きを付送らせても上るほどに今夜は先こゝに泊るとしたか宜  
 いと勝手口より伴れたる一間のうち農家とも商店とも分ちかね  
 れど家内大勢にて賑はしき暮しの容子は富たる者と思はれたり  
 老人はお米に浴させ夕飯を興へて後出きたり夜もおい／＼閑遊  
 の草臥や氣づかれでお眠からうが年をとるを心せはしくなり翌  
 緩くりでも宜いとなれどお前さんの身の上を一巡りお聞き申し  
 此方にもまたお話しが有と言ふその容子篤じつらしくは見ゆれ



三十九 雨 時 初

ども猶心根のはかり知れば嘘と實をとりませよき又話せば老  
 人しきりに打點頭左様した時なら私しの方にも些細みがあるが  
 納ては下さるまいか 采此やうに厚いお世話を請ますれば身に  
 ひました事なら老夫の有がたい私しは若い内他に種々難儀をか  
 けたともある罪ほろぼしに今では人を救ふを身の務めの様に思  
 つて居るのサ所が餘儀ない病人の世話をして放れさしきへ察さ  
 せておき是まで多くの醫師にも診察させたが家に傳はる薬方が  
 一ばん能きく容子なれど膝のどほり一に石病別して榮よりは介  
 抱で無れば届かぬ病ひゆゑ何卒と思つても家族は手づくな及人  
 では何程金をやつても眞實にして呉す夫ゆゑ今日もその看人  
 を見附に横濱まで往たのだが心當りが外れ空しく歸つて来た  
 且那どのの菩提の爲なら尼になるより一層の功德なると歸りて

は下さるまいかと言れか米も實に人の命を助けるはさ善根にな  
 るとは無となれば先立し夫の爲母と子の現世の爲にもならうか  
 又一ツには函根へ近いところ故間をみて彼處へもゆかれ我家の  
 容子を聞にも尼寺より便利なるとあらんと思ひければ心宜く  
 こむにぞ老人は大きに喜び猶これかれの話しでお米も寐させ北  
 身も臥所に入りたりけり斯て翌朝になり老人はか米を離れ塵  
 へつれゆくにか米は定めて獄病か瘡毒の骨がらみで臭氣により  
 も附れぬ者ならんを恐るゝ是見れば郡内織の重ね淵圓に同じ  
 夜着綴子の括り枕して寐て居る横顔夫に似たと思ふより我を忘  
 れ膝を進めて覗きこめば病やつれても若太郎にまがひ無ければ  
 オと斗り取すがらんとなしたるが四邊見まはし呼吸つき想し  
 と思ふ心の迷ひか狐狸に化されたるか夫とも夢はかかと助と

うきて茫然たり老人は是を知らねば老まう大丈夫日ましに快  
 る病人だから成たけ氣を附てねがひ升とて樂はしかく食料は  
 かやうくと教ふるゆゑか米は是にこゝろ附はん人目も有た  
 もの若逢つたら何様せうと飛立ばかりの氣を落つけ看護の手つ  
 ききを聞たりけり

第廿二回

か米は思ひもかけぬ田舎屋へ伴ひ來られ老人の頼み止がたく  
 て是を許諾すの寐問へ徑き病人の顔をみたるに正しく夫芳太郎  
 とは思ふものから病疲れたるが眠るが如くにて一言のものさへ  
 言ひ得ざる容子ゆゑ問によしなれば折を見て此家の人尋ね  
 問んさるにても夕べの悪者の被りし手拭ぬげ現れたる顔は夫と  
 共に函根の谷へおちいり死せしといふ銀三が偽り聲したるにれ

遠なきは此身の家を須賀町といひしにて疑ひなし銀三が生て此  
 へんに在ながら須賀町へより附す夫とかもふ病人も我家へ沙汰  
 せぬはかならず深い譯あらん然て見ると容易にこの家のものに  
 も問がたし氣長にことを探るに如す然りながら何卒はやく眞敷  
 偽敷しりたいたいものと思ふゆゑ病人の眼をあきたるとき我動を出  
 し「お薬を上ませうかと尋ねれば其聲の耳に入りしか病人はか米  
 の顔をじいっと見いり涙をほろりと顔したりしが又目を封て息  
 するのみか米のさてころあれ夫に相違なしと思ふゆゑ斯病體ひ  
 しは悲しけれせ死せりと断念し人の猶この世に在す疑しさに臥  
 合つき少しも早く全快させんとの願みより須賀町の家のとも四  
 邊のとも打忘れ寐食をすて介抱なしければ老人大いに悦び止  
 てころ十分に薬の効能も著はるゝなれとて熱藥水藥煉藥丸藥と

手をつくして療治なしお米も力の限り看護なしたれば今までと  
 違ひ肥だち早くて一月ばかりの中に返辭ぐらぬ出来る様になり  
 しかば老人いよく悦びお米のし様な方が此處へ停座した  
 は病人の全快なざる運が来たので私が身に取ても此上ない仕合  
 昨日より又今日は手足の働きが附て来ました最々つねの体にな  
 るに間はないと言れてお米はますく願み我身の疾れも打忘れ  
 看護するうち寒さゆるみて黄鳥の百囀りするところに至れば病人  
 は些ッ、首も上り少しは聲もでる様になりしかば主人の給は家  
 族を引つれ近村の縁者へ年始にゆくとして留寺をふ米に頼み出か  
 けたれば離れ座まきに病人とか米ばかりなりお米は病人に庭  
 を見せながら新しき空気にあてんと思ひ縁類の内の日あたりよ  
 き所へ蒲團を重ねしきて病人の手をどり漸ろこへ連れ出して夜

着に倚かいらせ米もしユ彼のをほり梅の花が盛りで美しく咲いた  
 では伊座いませんか此様なものでも伊座遊ばしてお心をなつき  
 り持て下さいまし貴夫は死去あうべしたと存じ泣てバツかり居  
 りましたに思ひ掛ない災難からこの家へ参つて見るとお命は有  
 ながら何様して此處にお在あうべすのか物も言れず手足も利か  
 ぬ伊大病かはられる事なら我身と替つてあげたいと思ふほどの  
 お苦しみ難御不自由で御座いましたらう譯をお聞まうしたいに  
 も四邊の容子が知れませんの一言のお口を利さへお困ううゆ  
 るマアくと御遠慮まうして居ましたがお吾儕を慰めてお在遊す  
 かへとほろりと涙す涙のしづく病人はたい點頭ばかりで目へ一  
 ばい涙をもてばお米はいと哀しさに我を忘れて病人の膝に取  
 りつき泣伏せ病人はやうくの事にてお米よく言たばかり

で息つき居るうの聲き飛立られしとオヤお物が言て来ました  
 チア、有がたいと病人の顔うち守れば病人も嬉しさうに前  
 話しがしたい一心で今なかれた時せうぞして息を張はづみに  
 思はず口が利れたのだが是なら宜いもう案事なさんな米オ、有  
 がたい事でございませぬへ然がお息が却合でおせつなううだ  
 後方へ廻って背中を撫る介抱の手をつくしたる優しさは是まで  
 口は利ねども知て居るゆゑ芳太郎涙を流して居たりしが自己の  
 身も何様した事で此家に居るのか譯らぬがお前は何で此處へ来  
 たのだと聞れさなきだに言ひたい事のみゆゑお米はとの咽まで  
 出たれを否々漸肥立て来るところへ苦勞をさせては悪からんと  
 思ひ米ア、此處へ参つたとは種々の譯でちよつとには往ません  
 がマアお話しすしたいのは、言ひかけ願ひさうに當を赤くして

顔を隠せば「芳」何様したのだ「米」オホ、あの男の子が生まれまし  
 たワ「芳」ナニ男の子が生まれたと開りやまア宜かつたなアと嬉し  
 出る顔色に笑を含みまで力づきて見あげれば「米」噂を聞き  
 「早くこの事を慈母さんにか知らせたいね」

第廿三回

さても「米」は「芳」太郎と始て物を言ひかはすとを得て相互に話  
 すと問べきとの多ければ「芳」太郎は一言いひては息を切り二言  
 ひては休みするを「米」は脊をなで樂を咽に涙させなをして歸り  
 無理をさせしと思ふものから家族の歸らぬうち此家の何  
 たるを問かかんとして是を尋ねるに「芳」太郎は函根にて谷へ落  
 りし後のとは絶ておぼえず少し人さう雨で見るを知らぬ家知  
 らぬ人の世話になり病わづらつて居る故不審は晴ぬと物が言れ

ぬので何もならず特に氣根の盡たる身置夢が九分現れ一分で居  
 るうちに「米」前が来て看病をして呉るから病院とやらでも有るか  
 と相場を立て居たのだが「夫」ちやア「米」前も此家を何だか知らず  
 連れて来られたのかハナアト首を垂しその折から親家の方に人  
 聲して家族らが歸りし容子なれば夫と二人は皆でしらせ頼も  
 様をうかひひかりぬ然れば「米」は看病にいよく張あひ附を以  
 て「芳」太郎は治りかゝると肥立はやく夫よりまた二十日ほど過る  
 うちに家の中を些々歩行るほぎになりたり一夜「米」の機さか  
 りに咲いで遊列る月は花の香につままれて一刻千金と定價づけ  
 ある春の眺め空しくすごさんも惜みや思ひけん主人の「芳」太郎  
 が離れ座しきに來り風寒からねば窓の障子を少しあげ障の花を  
 賞しながら「老」實の六ヶ敷と思つたが「米」の看病のよさに



の利めも大きに現はれ、全快同やうに成たは、か目出たかつた。最  
 長話しを致ても、芳太郎さんの身軀に障る氣づかひは無から、恐老  
 が身の上の物語りと出掛ませう。私の名は、岡柳真直。この所は、相模  
 國高座郡俣野村にて、東海道よりすこし西手へ入りたる、邊鄙家に  
 傳はる一種の藥法あり。其藥劑の草のうち、雪解をもちて、箱根山の  
 深谷に入り、芽さしを摘來りて、遣ふもの有ゆゑ、去年の春も例の通  
 り、人跡たにたる谷間を求め、あるくなれば、空氣味わるさに、三四人  
 の人を連れ、早川の流にうひて、山深く谷から谷へ傳ひゆき、日光も  
 届かぬ絶壁の下に、藥の草をさがして居ると、遙かの上より、瓦落々々  
 々、嘘と谷響して、落たる者に、悔りし、飛除見れば、山籠籠と、旅人なり  
 茲におめて、胸を撫で、借もく、危ふかりしと、一同に、呼吸つきしが  
 さるにても、此旅人、雲助ともが、誤りて、道より落したるならん、助か

るなら、助けたしと思ひ、立よりて、察るに、息は絶たれど、死切りしな  
 らねば、氣附を用ゆ水を口より吹入れたるに、蘇生はしたれども、思  
 出しのみにて、死人に齊しけれ、懐中に、國所の書附でも有うかと  
 探せしに、他の物は、無て、守袋の中に、森川芳兵衛二男、芳太郎として  
 誕生の年月が記しあつたを見出し、是はと驚き、その顔を見れば、見  
 るは、と、芳兵衛さんに似て居るので、同名の人ではない、全く我が思  
 人、森川芳兵衛さんの子に、相違ないと思つたから、落て損じた山籠  
 籠を用意の麻繩で、からげさせ、其中へお前さんを入れ、同勢給が、  
 りで、曳やつと元の道から、昇き出し、小田原の宿より、釣登で、こま  
 で、漸撥ひこみ、横濱は、まうすに及ばず、小田原、藤澤、岡崎といふ、醫  
 を、招ぎ、療治を乞はるに、籠籠もろとも、に落たので、身体に、疵は、た  
 と、附ぬが、其方、此方へ、當るひ、いさで、五、六、船を、船めたから、迎も、本

復はあるまいと五日か十日で皆断り夫から家傳の薬法が第一服中をとりのへるの効能なるゆゑ是を用ゐて試したるに結句醫師たちの薬より現があるのゆゑは手盛と極たれど腹の損じを並はせるには看護が専要と醫師も言ひ私もさう思ふ故夫から眞實な人を雇ひ介抱させんと氣を揉んでも金が欲さの看病では陰陽があつて十分に往ぬ困つたものと氣を揉むも芳兵衛さんへの恩返しとばかりではお分りに成るまいが諸君の譯は、言んと爲るべき下婢が縁類の障子をあげ旦那さまお茶花が出来ました

第廿四回

岡柳眞齋は芳太郎とお米に茶菓などをすゝめて後今さらお話しすも天窓の癖い譯だが私は元親がりの頃は眞三郎と古ひて思にも杓子にもかゝらぬ遊蕩もの親の金を持たし上方に上り大

坂にしがらく足を留しあひだ悪念の者の船めにて堂島の末相ににかゝり始めの勝利にひきかへて手振編笠と打なされたるのみならず百兩の金が無れば生て居られぬ譯出来て既に死うとなしたるを其頃芳兵衛さんも大坂に上り一ッ宿屋にて御懸念になり居たれば私の顔色にて容子を察し厚い御説諭のはては百兩の金まで貸て下されしは命の親と有がたく夫より諸君は勿論遊蕩も遊女ぐるひも慎み十人なみの身持とはなりたれど放蕩を盡したる揚句に多くの金を持逃したるなれば家へは歸れず大坂に介川を送るうち何様やら彼様やら百兩の金を調へ爲替だよりを以て尊大人へ返却はしたなれど大人は江戸のか住居ゆゑ御恩報じどころかか目に掛り目下お禮を言さへ出来ぬ不本意かれこれして又年月をおくるうち漸親への詫かない此保野村へ歸りしゆゑ

うの驛を話し直に江戸へ出て深川六郎の宅を御尋ねすしたと  
 ころが芳兵衛さんは頼にお亡りで何様いふ事やらお宅は五郎  
 前邊に御親類があるやうなれど夫も何處やら尋ねぬとの話し  
 にお墓参りをするとさへならず空しく戻つた残念さ朝に少  
 しの思も報せずして大人を鬼籍に入れしを悔しく思ひたりし  
 に計らざる函根の谷の災難はうの二男にて今はとんせ本服  
 年ごろの恨みを少しは晴せし喜ばし此處は私の隠居所も家  
 は少し離れし所近頃横濱へも商店をひらき存外にはんじやうす  
 れば身の上が樂になる程芳兵衛さんの思ひ出らるゝと昔  
 しかた氣の主人の話しに芳太郎は此家にて世話する譯を始め  
 知り親の仁恵の餘澤をよろこび全くうの芳兵衛の二男なりとて  
 伯父の養子になりしより此度駿府へ往んとして賦に出合函根の

谷へ落たるまでを話し今は何をか思ふ是なるお米は伯父の懐に  
 て我妻なるが如何して此處へ來りしか未だうの驛を聞ねば其い  
 ふかしのに米も膝を進めて函根より勘七權吉が戻りし話し  
 始めより竹五郎が懸幕に苦しみ産の肥立をもちて家を脱出し具  
 齋に救はれて此處へ來りしまでの事を話し境木とやらの山中で  
 妻を捕へしは函根山で貴郎と共に谷へ落て死したりと言ふ銀三  
 ならんと思ひたるに眞齋さまのか話しにては谷へ落たる者他に  
 無ゆゑ確に銀三で、座いましてと言ふを聞き眞齋もしきりに奇  
 遇を感し居たりしが眞ハテ夫でも種々こんなんの有とに相違な  
 いと言ふ證據は其銀三とやらが落ちて往たを眞鏡昇が拾つた紙  
 入の中に、言ひかけ立往しが頼て出來て眞是こんな手紙が這入  
 て居ましたと芳太郎の前へ置ば芳太郎一々探ひらいて見るを

五郎より銀三へ送りしと勘七より銀三へ送りあるは竹五郎、  
 七兩名のものもありて竹五郎の手紙に米は既に我手に入れ  
 同様ゆゑ程なくむかひを差出すゆゑ今些のあひだ遊んで居な  
 へ小遣ひの金が無なつたら早速送らんとなり又勘七が手紙は  
 如何なしたるか忠兵衛函館よりいまだ歸り来らざるゆゑ同前  
 に氣になしたる穴明印は盡く函根の谷の新亡者に存候せしむ  
 へさらりと云ふ帳尻になし置たれば最早安心の上は君の歸る  
 手つゞき竹印と誤り一刻も早く乗込の時をあげんとを苦辛すな  
 ぎ都て恐ろしき事のみにて芳太郎は駕籠の内には在りしかバ  
 突あたりて駕籠を谷へ落せしや知り得ざりしに今この手紙を  
 れば勘七、銀三、竹五郎三人の所爲なると判然たれば芳太郎も  
 も驚き呆れ乍然たるのみ言葉なし眞勝手を組み考へたりしが

太郎さんは御全快に近しか米さんは此處に在で新難かなる  
 據をつかみし上は悪人らを取り押へんとの易きは無論なれども  
 此上にまだ如何な事ぞう言ふ同類の有んも計られねバ私が江戸  
 へ往き極ないくでお政とやらに面會しまた御母公にもお目に  
 掛り探索を届かせしうへ打合せて所置爲に如ねば暫時私にまか  
 せたまへイヤもう怖い世の中と共に大息つきたりけり

第廿五回

岡柳真齋は翌朝直に江戸へいで坂倉の通ひ伴頭忠兵衛が住居へ  
 尋ねゆきお政にあひ芳太郎と米のとを話せばお政は夢かどば  
 かり打悦び「宿の忠兵衛も久しく函館へ参りをり此方の大變ん  
 をやつかはしたので一刻も早く戻らうと致し無理な船へ乗りこ  
 み悪い風にあひ蝦夷地の奥へふき流され漸一昨日かへり今朝早

くお店へ参りましたゆゑ利しが取つて御隠居さまをもお悦ばせ  
 ずし宿と御隠居さまを他の者に知れぬ様に申し進れしして参りま  
 すから少の間御待遊ばして下さいますと、嬉しいと足を空にし  
 出往しが程なくお菫と忠兵衛を伴ひ来りしかば眞齋ふたし函  
 根山からの段々を話せばお菫は餘りの嬉しさに半眞半疑ゆめを  
 現のさかひを分たぬ思ひをなせり斯てお菫お政眞齋忠兵衛の四  
 人相談して兎も角もかけ隔りては不都合と忠兵衛すぐに迎ひに  
 出立し芳太郎とお米を竊に根岸の別荘へともなへり其日はお菫  
 もお政も寺参りと写し朝より根岸にいたりて待既に死せりとせ  
 し芳太郎また尻寺へとのみにて行方知れざりしお米が無事と聞  
 りし顔を見てかたみの悦び嬉し涙のさきだちて迎へたるも隣り  
 たるも雲し詞は出ざりき誠は人の嬉しきは男の妻を迎へ女は夫

を持し時また初めて子を産したる時となれを今お菫芳太郎お米  
 らの面會の嬉しきは夫らを以て比すべきならず見る人よろしく  
 察したまへ斯て此日は山海の珍味を盡し料理に飲ぬ酒をも各す  
 とし芳太郎が函根の谷へ落いるまでを話せば眞齋これに次ぎお  
 米家出して俣野村へつれられし恐怖さを言ば芳太郎病中の苦し  
 みを物語りお菫とお政はお米が家に居ずなりしよりの竹五郎が  
 容子と勘七が振舞を話し怒りつ怨みつ悦びつ盡ぬ談話のう  
 ちに日影いつしか傾けばお菫お政は忠兵衛と共に須賀町へ歸り  
 眞齋はこの別荘に泊りたり斯て忠兵衛は勘七をあさむき銀三を  
 呼び迎へさするに銀三是を知らねバ歸り来り勘七と共に計り忠  
 兵衛を放逐さんと思ひ勘七もまたうの目算なりしに豈計らんや  
 兩人ともに忠兵衛生捕り座敷半へさびしく遠込め抱への爲者を

番に附たり茲に於て芳太郎はか米と共に母家へ歸れば見世奥の  
奉公人出入の者ら恟りしうの無事成しを祝して止ねば芳太郎と  
か米が常の仁愛を見るに足べし掛る處へ竹五郎入り來り思を仇  
にて返さんとせし惡の報いの速かなるを悔解し勘七と銀三が押  
込られ芳太郎さんとか米さんが歸つてお出たと聞たから思召通  
り御十分になすつて腹をお愈し下せへと膝を据たる自訴を見て  
與齋桐りや、其方は甥の竹松では無かと言れ此方も驚き才貴  
は伯父さん眞何伯父さんも能出來た幼稚とさの惡根性が己は未  
だに抜ぬチエ、畜生めがと言ながら持たる煙管で乘しかり  
涙多うちに打のめせば忠兵衛これを押し止めるも眞齋は身を震  
はしながら此者は私しの實の弟の子で子供の折には随分世話  
もしたれど身持わるくて十四五の時家を騒出し行力しれず有

たのが大人なつても此惡事芳兵衛さんへ恩返しと思ふたは大き  
な違ひ實の甥めが芳太郎さんへ仇をして見ると矢張りつちが掛  
り合ひ芳太郎さんは兎も角もかう成ては伯父が許さぬと威丈だ  
かになつて怒れば芳太郎心の内にか千世の事なと思ひ我も亦少  
し罪なきにあらねば此所置を如何はせんと考へ居たりしが眞齋  
の甥と聞きこれを押し止め其日は竹五郎を眞齋にあづけて歸し  
忠兵衛と計り眞齋の甥なるを以て竹五郎の罪を問はず只絶交し  
て出入を止め竹五郎をだに種便に濟す上は勘七銀三をも許さね  
ばならぬ故つかい込れし金を損とし初めて小僧に來りしとき  
肩揚附し衣服に木綿の帯をささせ迄の惡事を言ひきかせうの  
宿々へ引渡せり斯て芳太郎は眞齋へ目覺しき程の禮をなしか致  
を厚く賞し忠兵衛を後見同様にして見世の事に引續なむけれバ

此度の損を忽ち補ひますく 養母に孝を尽しいよく 米を  
睡じかりじかば芳吉の外男女あまたの子を儲け今もろの家業  
なしてありとなん  
(大尾)

初時雨楓廻錦

明治二十六年三月八日印刷  
明治二十六年三月十日出版

編輯兼  
發行者

鈴木源四郎  
小石川區掃除町三十三番地

印刷者

小林由造  
小石川區掃除町三十三番地

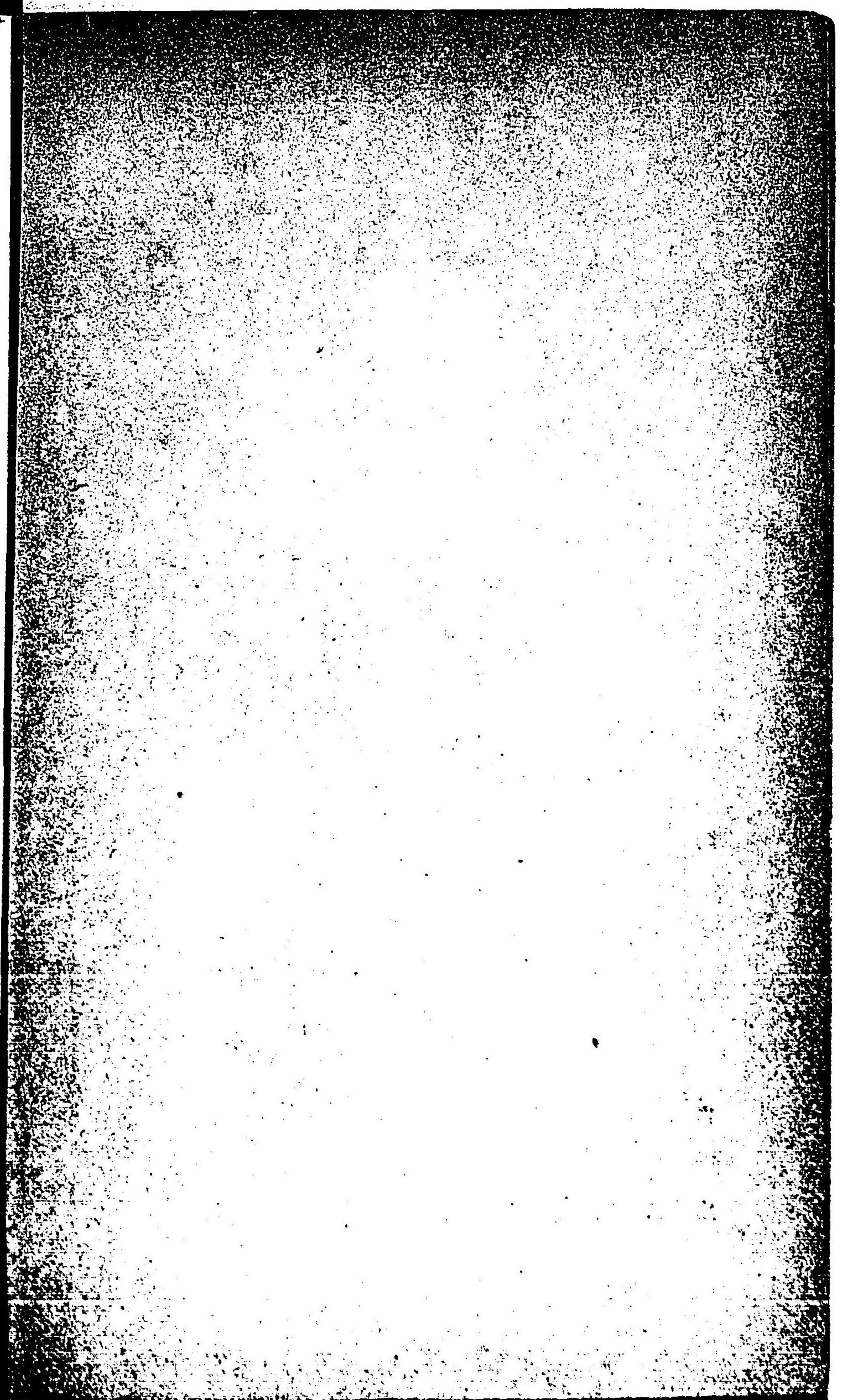
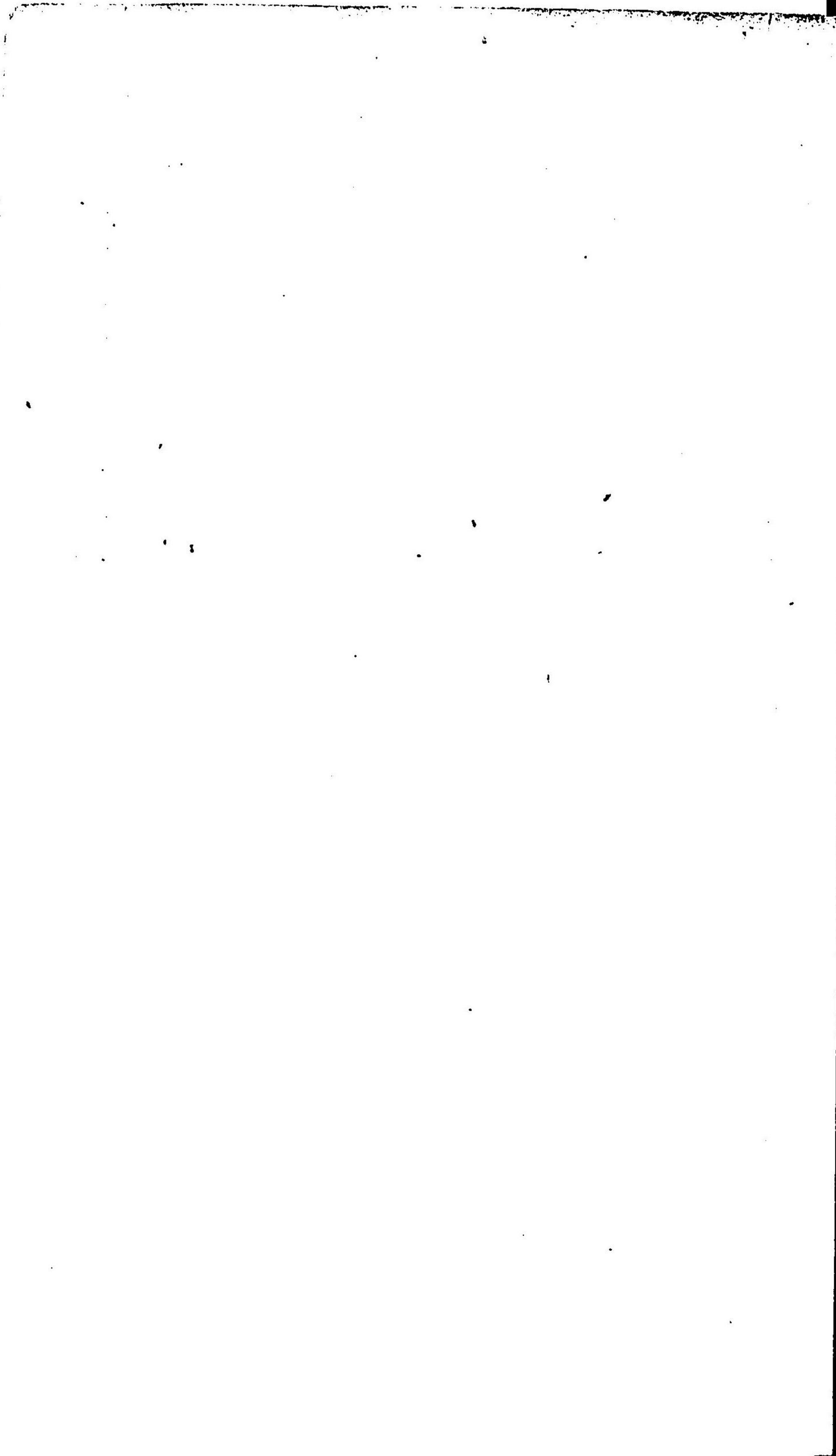
發行所

礫川出版會社  
小石川區掃除町三十三番地

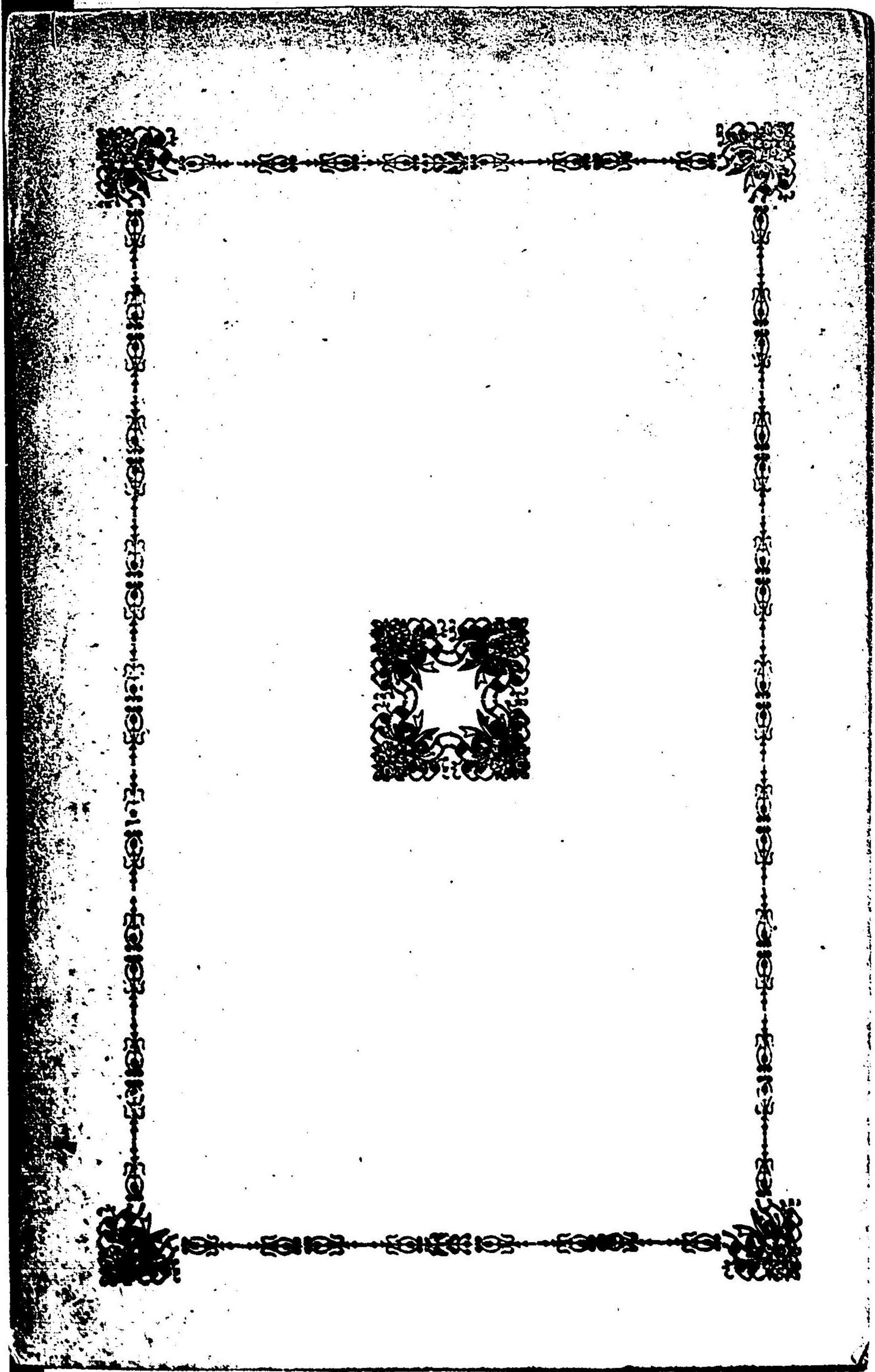


所賣專

- 日本橋區本石町三丁目 上田屋書店
- 淺草區三好町 大川屋書店
- 日本橋區通四丁目 金櫻堂書店
- 神田區裏神保町 井上書店







特11

716

初時雨  
楓

091254-000-2

特11-716

初時雨楓廼錦

梅亭 大人/著

M26

DBN-2108

